

岱明町の 指定文化財



平成3年（1991）12月
岱明町教育委員会

序

このたび、岱明町文化財保護委員会の御尽力によりまして、岱明町の貴重な文化財を紹介する立派な冊子が発刊されますことを、心から皆様と共にお喜び申し上げます。

文化財保護委員会ならびに、教育委員会に深甚なる敬意と、感謝の意を表します。

私達は、今日から明日へ輝かしい希望をもって努力しています。

顧みますと、その時代々々、風雪に耐えて生き、又精神的に、社会的に潤いを創り出しながら、豊かな生活を楽しんできました。すなわち、文化遺産であると思います。

本書の発行を機に「ふるきよきふるさと　たいめい」を再発見し、先人の文化遺産を継承し、新しい活力に満ちた「文化の創造」に邁進しなければなりません。

今回の本書の発行は、「ふるさと」を知る上で、大きな意義があるものと信じ、関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成3年9月

岱明町長　松倉秀美

ご挨拶

私たちの郷土の先人の、毎日の厳しい生活のなかから生まれた文化遺産は、時には天災地変にみまわれ、また、時には誕生の歓びや死との対峙の中から生まれた、かけがいのない尊い遺産であります。

私たちは、これらの遺産を正しく継承し、これを後世に伝えることが責務であろうと思います。しかしながら、ともすると、これらの文化財を何気なく見過ごしがちですが、大事にうけとめるとともに、より高い文化を創造していく使命もあるのです。

本町におきましては、文化財保護委員の先生方の文化財に対する深い愛情と理解によって研究調査がなされ、有形文化財、天然記念物、史跡等町指定文化財36件を数えることが出来ました。

これを機に、教育委員会におきましては、岱明町の文化財を小冊子にまとめ発刊することになりました。

地方の時代とも、地域の時代ともいわれている昨今、郷土を学ぶことから出発すべきではないでしょうか。明日を担う青少年のため、また家庭団らんの中に、特に生涯教育の学習資料として活用して頂ければ幸いに思います。

ここに「岱明町の指定文化財」を発刊するに当たり、各保護委員の先生方の永い間のご苦労に衷心より感謝の意を表する次第であります。

平成3年9月

岱明町教育長 村上孝一

研究ノートより

幼い頃から一家離散の憂き目に会い、世間の荒波にもまれながらも挫けずに孤独に耐えた一青年が、一家団欒の夢を人間の黎明文化に託し、赤城山麓の村々を行商するかたわら独力で考古学を研究して、ついには日本人の歴史を書きかえるに至った。

一万年以上の大昔の、土器を知らなかった時代に、石で造った道具だけを使って生活していたことを発見した。このことは一日本人の感動的な記録でもあると同時に、歴史に新しい一章を書き加えた瞬間の貴重な証言でもある。この事実に挑戦し、関東ローム層（赤土）の中から旧石器時代人の遺物を発見し、縄文時代以前の文化の存在を証明して人文科学・自然科学の新分野開拓に一大貢献を為し遂げた人こそ、一青年学者相沢忠洋その人であった。

岱明町は面積はそう広くないが、文化財の多く分布するところである。昭和三十年七月三十日西照寺小字備中の桑園の除草中に、西照寺の滝下義秋君（当時岱南中三年）発見のナイフ型尖頭器が、恰もその旧石器時代に属し最も古く、今からおよそ一万三千年前のものである。古い土器では、大野下八幡宮前にあたる台地の一部の小字目倉尾で発見の、穀粒押型文と山形連続文の土器があり、今から八、九千年前の縄文前期のものである。

縄文中期に至り、山下集落南端水田から一女高生が拾い上げた土器片が阿高式であることがわかり、ついに大発掘に発展したが、結果としては阿高式土器片を中心に多くの遺物が出土した（古閑原貝塚）。昭和二十三年六月のことであった。また東西に細長い大野台地の東端（現専修大学玉名高校）の崖下では、同じ形式の土器片が、厚い層の貝殻の中から多数出土した。尾崎遺跡と名付けられている。昭和三十二年二月には、中学二年の女生徒が拾い上げた二片の土器が発端となって、三地区的青年団の協力を得て、岱南中学生・玉高生が主体になり大々的な発掘の結果、弥生終末期の住居址十二基を発見、発掘に成功した。多くの家々には鍛冶場の設備もあり、一辺乃至二辺構えのベッドの設けがあり、また四箇の床面やベッドの上からそれぞれ鉄製鎌の出土品があるなど珍しい事が見られた（下前原正林住居址）。

昭和四十二年と翌年の二期にかけては、大原箱式石棺群が、畠地採土工事にかかる総数十四基



大原遺跡 第1号～第3号石棺

出土し、玉名高校生の協力を得て発掘されたがブルドーザーにかかって三基が大破、または一部が破壊されていたものがあった。その石棺は現在本町中央公民館前庭に移転復元されている。箱式石棺では、他に浜田綿津見神社西の溜池の上の台地の中から出土していることが分かった。石棺材の散乱状態でそのことを知ることもできた。もっと大規模なものとしては高道の弁財天古墳があり、内部に丸石を神体に弁財天女神を祀るためその名がある。外形は円墳状を保

ち、直径約三〇メートル、高さ六メートルほどあり、内部は一部改修されて原形を止めないが、石灯籠（天保十三年銘）を収める折改修されたものと思われる。副葬品については何も分かっていない。扇崎集落地南端の畑地や藪の中のかなりの広さの中に貝層が分布し、各種の石器等も発見された貝塚がある。因みに浜田綿津見神社の東の銘酒「浜千鳥」酒造場一帯の地域については、薄いながら厚さおよそ二十～三十センチくらいの、時代は少し下がるが室町時代頃の貝塚が分布しているところもあるし、中土東の集落地北側の畑の中の一部分には、完形品を多く含んだ中形や小形の須恵器が出土するところがあることも見逃すことが出来ないだろう。

中央公民館から西へ行った低い道路に沿う小畑一帯は、多くの御領式土器が出土した。縄文時代終りに近い頃のもので、下益城郡城南町東阿高にある縄文期の遺跡から出土した土器を原拠とし、有明海岸より東方へ六キロメートルの舌状台地北端に位置して、九十メートルにわたり、淡水産の貝層から出土する土器で從来の縄文式土器の手法を全く用いず、口縁は低い山形或いは直線とし、一本または数本の沈線を入れ表裏ともに丹念な磨きを加えて仕上げる特徴がある。

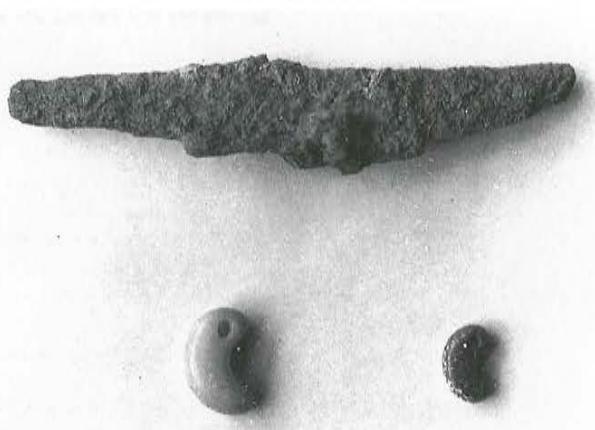
岱明町農協高道支所付近の道路に沿う北側には藤光寺前方後円墳があり、全長八十メートル、後円部の最高部で高さ十二、四メートル。現在は前方部に天満宮、後円部には薬師三尊像を祀る藤光寺の寺跡がある。

中野口の大野牟田を見下ろす高台の一郭の狭い範囲には主に小形の壺を中心として、完形品を含む土師器類一括が出土した。昭和五十年頃のことで地名に依って中野口遺跡と呼ばれる。

また、各寺院や旧家などの家々に秘蔵または伝承される古美術、工芸品の中で学術的にも高い価値を持っているものがかなりあり、それらを見聞する毎に各委員と相談して岱明町指定の文化財として、今までのところ総計三十五号に及んでいる。今後も尚続けられるであろうこのような文化財保護の真意をよく理解し、末永く愛護することに努力していただきたいと思う。

平成三年九月

田添 夏喜



大原遺跡第13号石棺よりの出土品
刀子及び瑪瑙製勾玉

岱明町の指定文化財 目次

序、目次	ページ
指定文化財一覧表	7・8
4・年の神遺跡	9
23・貝製腕輪	10
24・弥生式土器高坏	11
25・大原箱式石棺群	12
26・三角縁方格二神二獸鏡	13
5・弁財天古墳	14
7・青磁劃花花弁文碗	15
6・下村城（内野城）跡	16
2・大野伊勢守紀光隆の墓	17
12・高道城跡	18
3・中土の六地蔵石幢	19
19・上の六地蔵石幢	20
27・西中土五輪塔群	21
11・大野下田端地蔵堂前五輪塔	22
9・脇差備州長船祐定作	23
8・太刀横山藤原祐包作	24
14・扇崎要害の森館跡	25
15・太閤朱印慶長の役人数附	26

20・安養寺の阿弥陀三尊像	27
32・木造阿弥陀如来立像及び廚子	28
33・今泉の木造薬師如来坐像	29
21・中山家の木造馬頭観世音菩薩立像	30
13・扇崎千人塚	31
35・中島家弘法大師線刻画像石幢	32
29・蓮澤家所蔵品一括	33
30・中宮御所御筆建	34
10・僧豪潮書寒山詩六曲屏風	35
31・僧豪潮筆紺紙金泥仏説阿弥陀経	36
1・貴船神社の樟	37
34・役場の樟	〃
18・上野口菅原神社の銀杏	38
16・下前原のたぶのき	〃
22・西家の蘇鉄	39
28・安養寺の蘇鉄	〃
付録 国指定大野下の大ソテツ	40
付記 17・高道巖島神社の櫻	〃
岱明町文化財関係略年表	41・42
指定文化財所在地略図	43
あとがき	44

指定文化財一覧表

指定番号	名 称 及 び 個 数	指定年月日	所在地（大字と字） 所有者又は管理者
1	貴船神社の樟 1株	昭和52.4.8	野口 貴船 区長、氏子総代
2	大野伊勢守紀光隆の墓 1基	"	上 長津野 宮川哲太
3	中土の六地蔵石幢 1基	"	中土 寺ノ前 築田寛治
4	年の神遺跡	"	野口 早馬、平、西平 中・下野口区長、外
5	弁財天古墳	"	高道 石橋 村上敬一
6	下村城（内野城）跡	"	大野下 内野 区長、外
7	青磁劃花花弁文碗 2口	53.11.1	野口 大原 山本 二
8	太刀横山藤原祐包作（拵付）1振	"	三崎 林田 伊藤知之
9	脇差備州長船祐定作（白鞘）1振	54.4.14	野口 大道 大野金吉
10	僧豪潮書寒山詩六曲屏風 半双	"	"
11	大野下田端地蔵堂前五輪塔 1基	"	大野下 田端 区長
12	高道城跡	54.11.26	高道 城内 城内孝義、外
13	扇崎千人塚 1基	"	扇崎 鬼除 区長
14	扇崎要害の森館跡 付清正公馬つなぎの椋 1株	56.2.23	扇崎 明神尾 荒木正憲
15	太閤朱印慶長の役人数附 付略記 各1通	"	"
16	下前原のたぶのき 1株	55.4.24	下前原 東 荒木襄次
17	高道巣島神社の櫻 1株 (平成2年4月20日指定解除)	55.5.27	高道 宮後 区長、氏子総代
18	上野口菅原神社の銀杏 1株	"	野口 尾崎 区長、氏子総代

平成3年3月末現在

19	上の六地蔵石幢 1基	55.7.10	上長津野 区長
20	安養寺の阿弥陀三尊像 (3躯) 付転法輪堂扁額 1面	56.1.13	山下 清水尾 安養寺 限部真澄
21	中山家の木造馬頭觀世音菩薩立像 1躯 付芳名額 1面	56.2.23	高道 土穴 中山 旭
22	西家の蘇鉄 1株	56.5.12	高道 原 西 海男
23	貝製腕輪 7個	57.1.27	岱明町中央公民館 文化財保護委員会
24	弥生式土器高坏 1口	57.10.1	"
25	大原箱式石棺群 (11基)	"	岱明町中央公民館 岱明町中央公民館長
26	三角縁方格二神二獸鏡 1面	58.5.26	野口 北尾崎 田添夏喜
27	西中土五輪塔群 (2基・断片3個)	58.1.6	中土 西中土神社 荒尾市 小山俊寛
28	安養寺の蘇鉄 1株	58.10.5	山下 清水尾 安養寺 限部真澄
29	蓮澤家所蔵品 一括 (23点)	59.12.13	高道 土穴 専光寺 蓮澤興世
30	中宮御所御筆建 1口	60.1.30	"
31	僧豪潮筆紺紙金泥仏説阿弥陀経 1帖	60.7.11	"
32	木造阿弥陀如来立像1躯 及び厨子1基 付僧豪潮添状 2通	"	"
33	今泉の木造薬師如来坐像 1躯	61.3.10	上 今泉 今田勝喜
34	役場の障 1株	62.8.31	岱明町役場 岱明町長
35	中島家弘法大師線刻画像石幢 1基	63.10.20	鍋 立山原 中島初次
36	僧豪潮筆七言詩書唐崎松等 4幅	平成3.3.7	高道 土穴 専光寺 蓮澤興世
計 35件 有形文化財 24 (建造物7、工芸5、考古資料4、彫刻4、書跡3、古記録1)、 天然記念物(植物)6、史跡5。			

*指定当初の名称及び所有者等を一部変更している。



甕棺群の出土状況

上から石蓋単式棺・合口甕棺・石蓋単式大型棺

で支えた支撑石を標識として載せた朝鮮系の支石墓（ドルメンともいいう）の主体部である。両側からは、小児用小型合口甕棺2個も出土した。又この東350㍍辺りから小型甕棺2個、近くに多くの土器片や獸骨、石庖丁半欠1個。別に全長195㌢で、異例の3個の甕を組み合わせた大型甕棺、別に合口甕棺と、石の蓋をした単式甕棺2個も発掘した。（左上の写真）

年の神石祠の南西200㍍（天神社の近く）から打製石鏃7個（狩猟用）、のみ型石器2個（木工具）、石錐1個（漁撈用）等の外、土器片や、後の時代の須恵器・土師器・青磁の破片が出土した。その北西30㍍から小型合口甕棺。石祠から西120㍍西平の鉄道近くには、カキ・赤貝・ハマグリ・アサリの貝殻の層があった。弥生式土器片群もあった。また隅丸長方形、約4.5×2.6~2.9㍍の床面をもつ竪穴住居址を発掘。床に炉、柱を立てた穴、食料貯蔵用の穴等の跡があった。これは約1㍍東の大字下前原字正林の竪穴住居址と同じであった。これらの外、打製石鏃・石匙・石斧・磨製石槍（半欠）、石庖丁や貴重な石戈片、青銅劍（共に祭祀用）片も地表から採取された。石祠の東方の地下から奈良時代の須恵器、高さ18.6㌢の火葬骨壺が発見された。

以上を総合すると、近くの低地で水稻を耕作し、石庖丁で穂をつみ、海から魚貝を探り、石の道具だけでなく青銅器を使い、有力者のために支石墓を築き、竪穴住居に住んだ人々が、弥生時代前期からつづいてその後も住んでいた事が証明される結果となった。

ここに述べた多くの貴重な出土品は、町中央公民館に陳列されている。

4・年の神遺跡

（史跡 墳墓・住居址・貝塚）

岱明町役場前から大野小学校前を通る町道が、北へ延びて凹道となり、JR鹿児島本線の踏切にかかる右手（東側）大字野口の字早馬と、左手（西側）字平・字西平の全域が年の神遺跡である。この一帯の畠地を水田にする工事にあたり、遺物が次々と出土したので、町教育委員会は、昭和43年3月から翌年6月にかけて、当時玉陵中学校教諭田添夏喜氏を責任者として発掘調査をした。

踏切から、50㍍南の森に、いわゆる年の神の石祠をまつる。（近くに露出した大石も支石墓の支撑石。）この東30㍍の表土を、40㌢削り取っていた時、疊2枚敷き位の大石を、ブルドーザーによって南の空濠に運び落とした。大石の下を調査したところ地下から、ゴホウラ製輪軸7個（右貢）をもった、全長173㌢の大型合口甕棺（2個の素焼土器の甕の、口と口を合わせた中に死者を収め棺—ひつぎとしたもの）を掘り当てた。これが弥生時代の墓制の1つ、遺体を収めた棺を地下に埋め、数個の石

で支えた支撑石を標識として載せた朝鮮系の支石墓（ドルメンともいいう）の主体部である。両側からは、小児用小型合口甕棺2個も出土した。又この東350㍍辺りから小型甕棺2個、近くに多くの土器片や獸骨、石庖丁半欠1個。別に全長195㌢で、異例の3個の甕を組み合わせた大型甕棺、別に合口甕棺と、石の蓋をした単式甕棺2個も発掘した。（左上の写真）

年の神石祠の南西200㍍（天神社の近く）から打製石鏃7個（狩猟用）、のみ型石器2個（木工具）、石錐1個（漁撈用）等の外、土器片や、後の時代の須恵器・土師器・青磁の破片が出土した。その北西30㍍から小型合口甕棺。石祠から西120㍍西平の鉄道近くには、カキ・赤貝・ハマグリ・アサリの貝殻の層があった。弥生式土器片群もあった。また隅丸長方形、約4.5×2.6~2.9㍍の床面をもつ竪穴住居址を発掘。床に炉、柱を立てた穴、食料貯蔵用の穴等の跡があった。これは約1㍍東の大字下前原字正林の竪穴住居址と同じであった。これらの外、打製石鏃・石匙・石斧・磨製石槍（半欠）、石庖丁や貴重な石戈片、青銅劍（共に祭祀用）片も地表から採取された。石祠の東方の地下から奈良時代の須恵器、高さ18.6㌢の火葬骨壺が発見された。

以上を総合すると、近くの低地で水稻を耕作し、石庖丁で穂をつみ、海から魚貝を探り、石の道具だけでなく青銅器を使い、有力者のために支石墓を築き、竪穴住居に住んだ人々が、弥生時代前期からつづいてその後も住んでいた事が証明される結果となった。

ここに述べた多くの貴重な出土品は、町中央公民館に陳列されている。

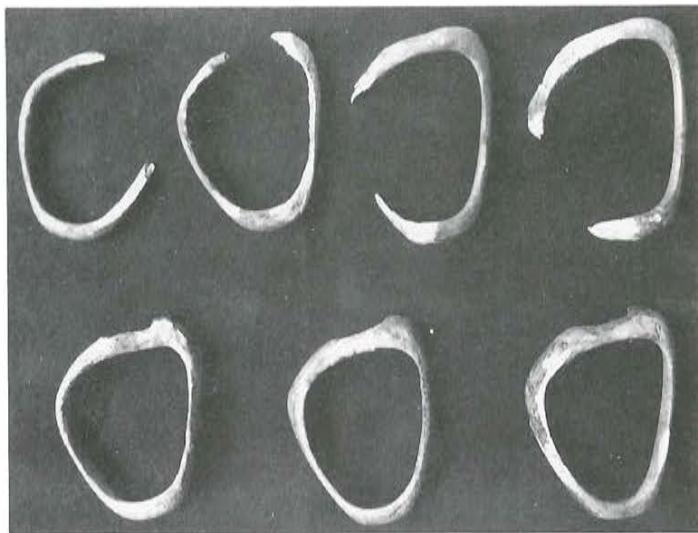
左頁初めの方に述べた、年の神石祠の東30m辺りから、ブルドーザーによって運び落とされた大石のあった下を、付近の高校生が掘つて、甕の中から白い骨のような輪を5、6個持ち帰ったというので、翌日高校生を訪ねて話を聞き、貝輪6個（内4個は欠損）を引き取った。又現地を調査し、問題の全長173cmの大型合口甕棺の中から、右上腕骨の一部と、その下腕に当たる棺底から貝輪1個を発見した。前の6個もそこに、ぎっしりつまって並んでいたと言う。これらは内法で縦7.0~7.6、横5.4~6.0、厚さ1.2~1.7cmのゴホウラ製の腕輪である。

縄文時代以降、伝統的な貝製腕輪は、弥生時代にもひきつがれ、弥生時代には、南海産の大型巻貝のゴホウラを縦切りにして男性が、イモガイ（形が里芋に似ている）を横切りにして女性が、前腕に装着した例が多いと言う。

ゴホウラは巻貝の一種で、スイショウガイ科（ソデボラ科）に属する。奄美大島以南、熱帯太平洋に分布し、水深約10~20mの海底（サンゴ礁上）に生息。紡錘形で高さ約15~18cm、重厚頑強な殻を持ち、殻表はクリーム色で赤褐色の斑紋を散らす。殻口はいちじるしく拡張し、殻口内は滑かで淡紅色、外唇縁は肥厚している。この縦に切って腕輪にしたゴホウラの産地は、その厚さからみて、フィリピン海域産でなく南西諸島（薩南諸島と沖縄諸島）産であろうと言われる。

種子島広田の埋葬遺跡からおびただしいゴホウラ製腕輪が発見された。このような南西諸島の文化が、北九州の北西海岸（飯塚市立岩遺跡が有名、佐賀県吉野ヶ里遺跡、熊本県では、天草郡内や宇土市内と、ここ年の神）や、山陰の響灘や瀬戸内海沿岸に伝わったのであろう。

さて、字早馬の畠2枚敷き位の擡石の下に、高さ84cmと89cmの2個の甕が、口径70cmで合わさった大型甕棺に埋葬された人物が、右腕につけていたゴホウラ製腕輪は、単なる装身具だったのだろうか。この腕輪をつけるべき人物は、幼い頃に選ばれ、少年少女期には腕に着装され（成長してからの着脱はむずかしい）、額に汗して、狩猟・漁撈・農耕などの労働に従事しなくてよい人物ではなかつたろうか（腕輪をつけたままで働きにくい）。すなわち呪術ないし宗教的な司祭者など特別な権威を持った人物と思われる。弥生時代の生活は、自然条件に大きく左右されたから、人々は司祭者を立てて天地の靈威に対し、豊かな收穫や、災難を避けることを祈った（呪術）。このような特別な力を持った司祭者ないし統率者だから、わざわざ大石を用いた支石墓に埋葬したのであろう。ゴホウラ製腕輪が7個も一括出土したのは県内ではめずらしいとされる。



ゴホウラ製腕輪 7個
年の神遺跡出土

やよいしき どき たかつき
24・弥生式土器高坏 1口
 (有形文化財 考古資料)

数万年から1万年も昔の先土器(無土器)文化の時代、大字上^{じょう}の今泉遺跡、大字野口の年の神遺跡、大字西照寺の備中^{ひつちゆう}遺跡から、ナイフ型の打製石器が発見された。その後の約1万2千年前から磨製石器へと進み、また土器が発明された。それから紀元前3~2世紀ごろまでを縄文時代^{じょうもん}といふ。大字高道の古閑原貝塚から縄文中期の阿高式土器や、石器や、石槍の刺さった鹿の頭骨の外、8粒の糞が出土したが、この時期の稻作は早すぎるとして学界に承認されなかった。縄文時代は主に、狩をしたり、木の実や、海では魚・貝をとった。台地に竪穴住居の集落をいとなみ、屈葬の風習があつた。

次の弥生時代は紀元前3~2世紀から紀元後3世紀にわたり、水稻耕作と金属器の使用を特徴とする。この前期の遺跡、大字山下の中道具塚では、カキ・アゲマキ・ハマグリ等の貝殻や、土器片、石鎌・石斧等が発見された。炭化糞数十粒や、稲穂を摘みとる石庖丁の破片が出土した。長方形の穴を地面に掘った石蓋土壙に人を埋葬していた。大字野口の塚原には甕棺墓群があり、同じく年の神では支石墓その他が調査されたことは既述の通りである。大字下前原の正林では竪穴住居址12戸が発掘され、石庖丁と鉄製の鎌なども発見された。近くの低湿地を畦で囲み、水を引き、糞をじきま播きして、石庖丁で穂だけ摘みとり、甕で蒸して食べたのであろう。水稻耕作の発達は、社会に大きな変化をもたらし、貧富や身分の差をまねき、地域の統率者も生まれてきた。

縄文時代の縄文式土器(縄目の文様があるので、この名がある)は黒褐色のもろい土器であったが、次の弥生式土器(東京文京区弥生町の町名からとる)は焼成熱度も800~850°C前後と高くなり、赤褐色のかたい土器で、文様のないものが多い。どちらも発見された地域や、土器の時代、文様によって種々の名称が付けられ研究されている。作り方は、粘土をあらかじめひも状にして、巻き上げる手法で作られた。形によって、甕・壺・深鉢・浅鉢・皿・高坏、その他に分けられる。食料の貯蔵や煮炊きや、食べ物を盛るのに使われたのである。

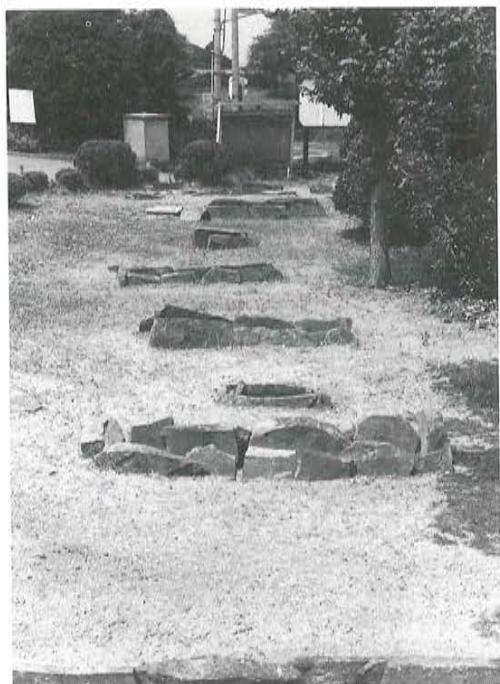
昭和42年5月から翌年2月にかけ国道208号線(旧産業道路)の開設工事が進み、大字野口字大原の208号線北側畠地の採土にかかり、弥生時代終末期(大体3世紀前後)の生活遺構が確認され、町教育委員会による調査が行われた。竪穴住居址4戸・土器(壺・高坏・小容器)・鉄器(釘・斧・鎌・鍔・刀子=こがたな)等が出土した。箱式石棺も発掘された(右頁)。

左写真、この大原遺跡出土の高坏は、弥生時代の終り頃、粘土に砂を混ぜて作った素焼。食べ物を盛ったり、あるいは儀式に用いたものであろう。坏部の直径24.6センチ、深さ7.6センチ。外弧が大きく開き、外縁で1.2センチ立ち上がって口縁となる。

円筒状の脚台部は、高さ12.0センチ、下底部は直径14.5センチの喇叭状に開き、裾部に径1.0センチのまん丸い小孔3個をあける。器面調整の刷毛目の外は、装飾をほどこさず、簡素で均整のとれた形をしている。当時の生活の一端をしのばせる。



弥生式土器高坏
町中央公民館展示



町中央公民館前の大原箱式石棺群
東より写す。手前から、7. 9. 10. 12. 11. 3. 13. 1.
2. 8. 4号石棺の順。

石棺は数枚の板状安山岩の自然石を四側に立て、適當な広さの箱形の棺をつくり、死者を埋葬した上に、同じ板石を蓋として載せたものである。

町中央公民館前に復元したものの内、1～4号石棺は、長さ65～95センチで、小児用らしい。7号石棺の内部は朱で塗られ、30歳代男性のほぼ完全な人骨があった。8、11、12号石棺は、長さ155～165センチ、10号石棺は100センチ。9号石棺は右の実測図のように、大小17個の板石を縦170センチ、横45センチの長方形に組んで棺とし、うすい平石23個を深さ35センチの底に敷きつめて床とし、床幅の広い方に枕となる平石を置いて死者を横たえた。中央右腰に当たる部分に鉄鍔1本が副葬されており、大きさからみても、一族中最高位にあった者であろう。また反対側中央板石の内側に、線描きの棹をさす小舟と、輝く太陽かと思われる絵らしきものが認められるのは珍しい例である。

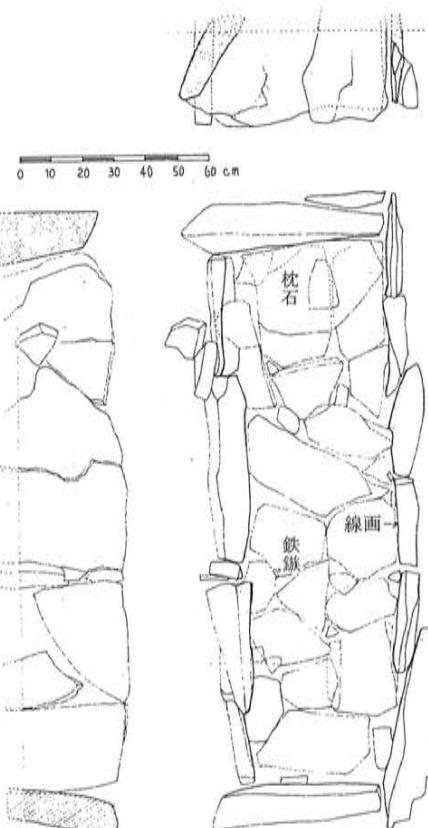
13号石棺は、あとで国道南側から発見された。縦175、横43～50、深さ30センチの内部に朱粉が撒かれ、刀子1振と瑪瑙の勾玉2個（「研究ノートより」参照）、碧玉管1個（半欠）が出土した。床の両端の平石は枕と思われるから、互い違いに1組の夫婦を同じ石棺内に埋葬したものであろう。夫婦共葬の例は他にも見られる。

25・大原箱式石棺群 (11基) (有形文化財 考古資料)

左頁に述べた調査に於いて、大原の畠地（国道208号線北側、今レストラン大門）から、弥生時代終末期の箱式石棺が多数、町内で始めて発掘された。42年8月町教育委員会は、破損のひどい2基（5・6号）を除いて11基の棺材を、中央公民館前の広場北側に移して、復元した。

弥生時代になって階級が成立するにつれ、地域によって、種々の墓制が見られるようになった。九州北部では、甕棺墓、支石墓（前述年の神遺跡の例）、箱式石棺墓（ここ大原の例）、木棺墓（大原南遺跡より平成元年6月長さ670センチの木棺墓、他に箱式石棺数基も発掘）、土壙墓（中道貝塚の例）などがあり、各種の副葬品も報告され、当時の生活・文化を知ることが出来る。（最近特に有名になったのが、佐賀県神埼郡吉野ヶ里遺跡）。

ここ大原出土の箱式



第9号石棺 実測図
大原遺跡出土

26・三角縁方格二神二獸鏡 1面
(有形文化財 考古資料)

弥生時代には、土器・石器の外、生産用具や武器として鉄器、祭祀の道具として青銅の銅劍・銅鉢・銅鐸などが使われた。外に銅鏡が、弥生中後期の甕棺・箱式石棺や、古墳時代古墳の副葬品として出土する。権力者の宝器あるいは、呪術的な品であったらしい。

中国漢式の銅鏡（漢鏡）は、銅と錫の合金（青銅）で、普通円形、鏡面をわずかに反らせたならかな凸面とし、水銀で拭きあげて顔が映るようにした。鏡の背面に鋳出された各種の装飾によつて、特有の名称が付けられる。中国製（舶載鏡）の外、日本製（仿製鏡）がある。作成年を銘文としたものを紀年鏡といい、時代を決定するのに役立つ。邪馬台国の女王卑弥呼が中国魏の都洛陽に、使いを送った景初3年（239）の銘のある鏡や、使いが数々の下賜品を持ち帰った正始元年（240）の銘のある鏡が、わが国のかいつかの古墳から出土する。これらの鏡の分布やその系譜等から、古墳相互のつながりや、初期大和政権の勢力範囲が研究されている。

三角縁方格二神二獸鏡の名は次のような装飾に由来する。最外縁の、断面が三角形をなす三角縁の内側に、小刻みで外向きにとがった鋸歯文と、細密な無数の放射線をめぐらして外区とする。鏡背の中心に伏せた半球状の底には紐を通す孔をもつ。この紐を二重の方格で囲み紐座とする。その方格の相対する外辺のそれぞれに、冠を接して端坐する神仙と、他の外辺に接して、躍動する竜虎を配し、4者の間には、4個の乳房文の凸起を置いて区切りとする。この内区主体の4画像は、中国の伝説の、西王母（崑崙山に住むという女の仙人）と東王父（西王母と対をなす男仙）、聖獸たる青竜と白虎の4者であって、目出度い不老長生の思想を現わす。画像に神獸を用いるものを神獸鏡といい、その数によって、三神二獸鏡・四神四獸鏡などと呼ぶ。



三角縁方格二神二獸鏡 実測図 面径16.4cm 表紙はこの写真

この銅鏡の特徴は、普通内区中央の方格文の外側に、T・L・V型の図文（規矩文）を加えるが、ここではこれを伴なわない。また文様が磨滅しており、多年常用されたと思われる。朱の残存が認められるので、朱を敷いた棺内に副葬してあった事が分かる。出土地は不明。中国3世紀、後漢のあとの三国時代の魏（220～265）からの舶載鏡と推定される。

大字開田にあった院塚古墳からは、面径15.48cmの舶載鏡、画文帶同向式六神四獸鏡が発見された。熊本市立熊本博物館の所蔵で、熊本県立美術館装飾古墳室に展示されている。

5・弁財天古墳
(史跡 墳墓)

大字高道字石橋にある弁財天古墳は、樟・棕・杉の巨木が茂って、三方を大小の道路が通っている。底辺が、長径約35、短径約27トルほどの構えん円形で、高さは約7トルの円墳か、あるいは前方後円墳であったかも知れない。古墳時代後期と思われる。平成2年3月、南側封土の崩壊を防ぐため、町は、高さ1.25と2.60、長さ18.0トルの石垣を築いた。

南東の石段を登って左の敷石を行くと、封土の中段に南向きに羨門が開き、石室がのぞかれる。間口2.20トル、奥行2.40トルで、奥の横幅2.40トルのほぼ正方形の4辺から、内壁に、厚さ3～10センチの割石を小口積みに積んでいって持ち送った天井の、床から最も高い所で、2.20トルの横穴式石室である。その奥壁に沿って東西に、両端に縄掛凸起をもつ凝灰岩の家形石棺の蓋(1.80×0.75トルの屋根で毀された穴がある)の下に、安山岩板石4枚を以て棺身を組む。中にこの地方の豪族が葬られた訳だが、人骨も副葬品も残っていないかったと言う。現在は卵形の大石の外、白い丸石数個を收め、これを弁財天の御神体としているので、古墳の名となった。弁財(才)天は、もとインドの神、のち福神とされた。琵琶を弾く女性神。七福神の一つ。

開口した羨門部内側左右に石柱を立て、細長い石材を横たえて天井を支える(後補)。天保3年(1832)在銘の石燈籠が外側左右に立っているので古くから信仰された事がわかる。現在は、付近の20戸ほどで、毎年12月15日にお祭をし、また清掃保存に努めている。

わが国は、4世紀の前半までには大和朝廷によって、九州北部から中部地方までは統一されたと考えられている。統一の進んだ4～6世紀頃は、古墳が盛んに築かれ、普通3世紀末から7世紀中葉までを、大和時代の内の古墳文化の時代、考古学では単に古墳時代という。一般に古墳とは、豪族等の死後、遺骸を収めた棺を覆う石室を造り、上に土を高く盛った墓をいう。外形によって前方後円墳・円墳・方墳等に大別される。石室は構造によって、竪穴式と横穴式がある。副葬品として、鏡・玉類・鉄製品などを埋めた。

本町内大字開田にあった院塚古墳は現在九州松下電器の工場敷地になってしまっている。昭和39年の調査では、全長約78トル、高さ約6.5トルの古墳時代前期の稀有な前方後円墳で、後円部から4基の舟形石棺(内3基は熊本市立熊本博物館蔵)・船載の神獸鏡(左頁)・玉・鉄剣等を出土した。外に大字高道の農協高道給油所前の、天満宮から東、薬師堂にかけて藤(東)光寺古墳があるが、まだ未調査。玉名郡内では菊水町江田の船山古墳は、銘文のある鉄刀その他を数多く出土したので、全国的に有名である。大阪堺市の仁徳陵古墳は墳丘の長さ480トル、高さ35トルで日本最大である。



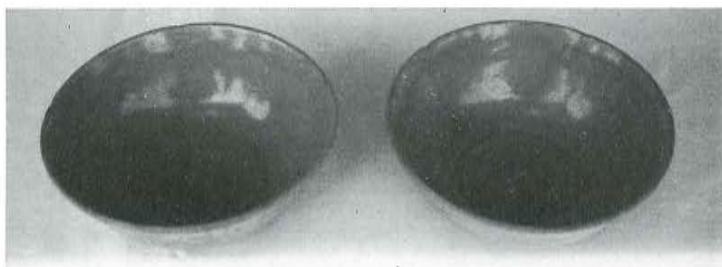
弁財天古墳の羨門部(南面)

中央門型石組は後で補ったもの

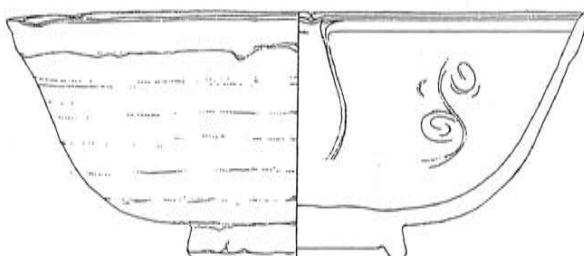
7・青磁劃花花弁文碗

2口

(有形文化財 工芸)



青磁碗 2口
同型同大 左1号, 右2号



青磁碗 2号 側面図

原図実物大 直径17.0cm、高さ7.3cm

昭和32年には、大字庄山字旗布の畠地からこれとよく似た青磁碗1口と、土師器小皿14点が発掘されている（個人蔵）。青磁碗は、鎌倉時代の13世紀初頭、中国南宋から渡来したと思われる。

大原同時出土の完全な土師器皿5点は、みな直径8.5cmの赤褐色。土師器は、弥生式土器のあとを受け、古墳時代・奈良時代・平安時代に至るまで長く使用された素焼土器である。

陶器は、土石の粉末を用いて造形したものに釉薬をつけ焼き固めたもの。磁器は普通白色、質は固く緻密で水を吸収せず多少透明である。この陶磁器のことを英語で *china* というほど（漆器のことを *japan* という）、中国はその本場であって、その代表が青磁である。珠玉に勝る釉色が世界的に絶賛されてきた。青く澄んだ宝石のような肌の輝きは、素地や釉薬に含まれるわずかな鉄分が、強い温度によって焼成される時に出来るので、黄色から緑色まで変わって発色する。日本へは平安時代から輸入された。中国青磁の最も発達したのは、南宋（1127～1279）の頃というから、日本では、平清盛から源賴朝・執権北条時宗の頃に当たる。この頃日本から中国への輸出品は、金・水銀・硫黄・木材・米・刀剣・美術工芸品（漆器・扇）。日本への輸入品は、宋錢（日本で流通した）・陶器・香料（南海産）・薬品・書籍（太平御覽・一切経など）。博多は中国貿易で繁栄した。日本をはじめ東南アジア・中近東・ヨーロッパへも盛んに輸出されるほど多くの窯で焼かれた青磁は、次の元の時代から、質が低下していった。日本へ渡来した優秀な青磁の壺・花生・水指・香炉・瓶などは、多く上流階級の間で珍重された。青磁碗の類は、ある程度日本各地に行きわたったと思われる。熊本県内や、特に北九州から完形品がよく出土しているので、飯や汁などを盛るという本来の目的で、日常使用されるに至ったのではないだろうか。中国との交易を示す資料でもある。

昭和34年8月下旬、大字野口字大原、山本二氏の住宅工事において穴を掘っている時、地下70センチ所から、この青磁碗2口と、土師器7点が共に貯蔵されていたような形で一括出土した。青磁碗2口は同じ形、同じ大きさ。口縁部の直径17.0、高さ7.3cm。口縁を5等分して小さな刻み目を入れ、内面に片切彫りの手法をもって、碗底に、円周方向へ浅く弯曲する2平行線を劃し、各劃内に2段に重ねた右巻きの卷雲文を配した模様で飾る。灰色の素地に、灰緑色の釉薬（うわぐすり）をかけて焼成し、わずかの荒目釉肌に淡い色調がよくマッチして、青磁特有の優雅さをかもし出しており、珍重されつつ愛用されたと思われる。

しもむらじよう うちのじようあと
6・下村城（内野城）跡
 (史跡 城館跡)

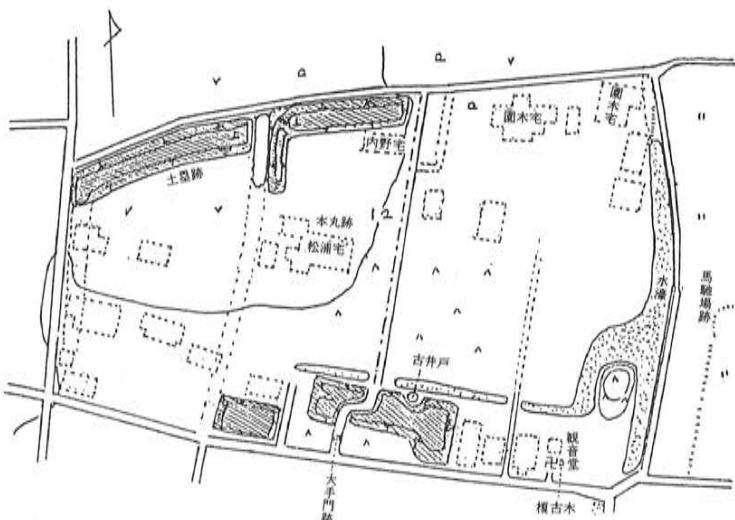
古くからの下村は、明治12年（1879）1月下旬となり、翌年大野下村と改称、今は大字大野下である。そのほぼ東端字内野集落の約南半分を占める区域を下村城跡、又は内野城跡とも言う。

現状はやや異なってきたが、昭和52年頃は、下の略図のように、南辺町道に沿う城の外郭170㍍の中央部の、長さ4㍍、高さと幅2㍍の残存土塁を、凹道が鍵の手に通り、南大手道となって90㍍北へ直進し、城郭北辺170㍍に沿う部落道へ通する。この大手道出口より西へ、最大幅8㍍、高さ2㍍程の、内外に周溝をもつ土塁が伸び、西辺町道で切れる。東辺約100㍍には、土塁に代わって水濠が部落道に沿い、南端近くで西へ曲がる。南大手道入口東裏手に井戸の跡と、西に離れて土塁が残っていた。この外に遺構らしいものは認められない。

『肥後古城考』には「下村古城 下村にあり、齋院次官親能（註・右大将家の命に依て）、當国に下向し、當城を築きて居り、後に南田の新城に移る。其後中絶、龍造寺隆信家人代る々々在番、天正十年落去と云、」と述べている。中原親能（1143～1208）は源頼朝挙兵以来の重臣。頼朝のチエブクロと言われた大江廣元の義兄。平家追討に功あり。公文所寄人・京都守護職（数回）・齋院次官（52代嵯峨天皇が皇女を京都賀茂神社に奉仕させた事に始まる齋院は、その皇女又はその居所をいう。齋院司はその役所、次官は2番目の職員。）や掃部頭・公事奉行人・鎮西守護人となったという。筑後・肥後・豊後の3国守護に任せられたのは建久6年（1195）か。肥後に下向した事はない。親能の所領には、筑後国三池郡と肥後国玉名郡久重・長田（共に南関町）等の名もある。子孫は多くの遺領を分与され、肥後では、詫磨氏・鹿子木氏・竹迫氏となった。

親能は守護の役目柄、家臣が下村の内野に土塁や周溝をもつ屋敷を構え、のち赤崎城（上記南田は原文の間違い。）へ移ったのであろう。今でも残る、要害のより本格的な、本丸・二の丸・三の丸・堀切と、三方に陥しい崖をもつ赤崎城は、小代氏の出城となってからも手が加えられたのであろう。赤崎城は、現長洲町もと六榮村の行末川右岸、長洲岱明清掃センターのすぐ南、字古城の台地突端にある。

では何時、何故この赤崎の新城へ移ったのか、建久4年（1193）紀国隆は源頼朝から、下村を含む大野別符の地頭に任命されており、これとのつながりはどうか、真相は分からぬ。宝治元年（1247）武藏国入西郡小代郷の小代重俊が野原荘地頭に補せられ、初めは代官に支配を任せていたが、その子孫が野原荘に下向したのは、元寇文永の役（1274）の後である。



下村城（内野城）跡略図

昭和52年4月頃

おおのいせのかみきのみつかはか 2・大野伊勢守紀光隆の墓 1基

(有形文化財 建造物)



大野伊勢守紀光隆の墓 総高140cm

周りの玉垣は後年、玉名市滑石大野家分家より寄進

大字上字長津野、六地藏の三叉路を西へ
100mほど行った右手、もと大悟山平等寺の
墓地内に、総高140cm、他の地輪の上に五輪
塔が立つ。2段目の地輪左右に「文中二年
癸丑八月廿三日入滅」『伊勢守紀光隆 行
年卅九』と刻む。南朝年号の文中2年は1373
年、南北朝の末頃。

戦国時代の弘治3年(1557)3月、亀甲
伊豆入道紀宗善が書き残した『大野家由緒
書上』に、八幡別当紀國隆法名清源は、建
久4年(1193)4月、鎌倉幕府から玉名郡

の内大野別符の地頭職に補任されて下向し、息子3人に各55町を、娘5人には入婿をとり、中尾・
山田・岩崎・尾崎・河崎を分割相続させたと記す。しかし肥後の在庁官人や玉名郡司に、紀姓が見
える事から、紀国隆は下向したのではなく、国隆以前の紀氏が大野別符を開発したとされる。

奈良時代後半から平安時代にかけて、有力な寺社や貴族は私有地(荘園)を増やした。紀氏も大
野別符を福岡笠崎八幡宮(領家)と、京都石清水八幡宮田中坊(本家)に寄進して保護してもらい、
自分は支配権を確保し、荘の鎮守として繁根木村に八幡宮を勧請したのであろう。玉名郡内には外
に、玉名荘・伊倉荘・野原荘・東郷荘その他の荘園があった。源頼朝は、守護を国々に置き、又地
頭を郡や荘園に置き、荘園を管理し治安を維持し、国や領家・本家に年貢を納めさせる権利を得、
建久3年(1192)には征夷大將軍に任せられた。翌年在地の紀国隆は大野別符地頭になった。荒尾
野原荘には関東から小代重俊の子孫がおくれて下向し小岱山簡嶽に築城する。

文永11年(1274)元・高麗の大軍は博多湾に上陸、弘安4年(1281)には再び北部九州を襲った。
有名な『蒙古襲来絵詞』にその時奮戦した「大野小次郎くにたか」と名が見えるのは、地頭紀国隆
の子孫で、一族の大野岩崎太郎・大野田島十郎幸隆が、肥前国神崎庄に、それぞれ田地5町・屋敷
1宇・畠地2段の勲功賞を受けた。築地諸太郎隆能も神崎庄内に恩賞を得た。

鎌倉幕府が滅び、南北朝時代となって、野原荘小代氏はおほむね、足利尊氏の北朝方に属したの
に対し、大野氏は菊池氏と共に一貫して後醍醐天皇=南朝方に与した。正平14年(延文4年、1359)
6月、伊勢守紀光隆は自分の知行地岩崎村内前田6反を高瀬清源寺に寄進して武運長久を祈り、8
月には菊池武光に従って、筑後川に少弐頼尚の大軍を破った。後十余年間は九州に於いて南朝方の
最盛期であった。しかし京都では足利義満が3代将軍となり、幕府方今川了俊は、大宰府から懐良
親王や菊池武光を追い肥後に迫った。文中2年(応安6年、1373)2月には伊倉荘と大野伊勢守跡
25町は小代重政に預けられ大野氏領は削られた。この8月に没した伊勢守紀光隆の墓が冒頭に掲げ
た五輪塔である。

たかみちじょうあと 12・高道城跡 (史跡 城館跡)

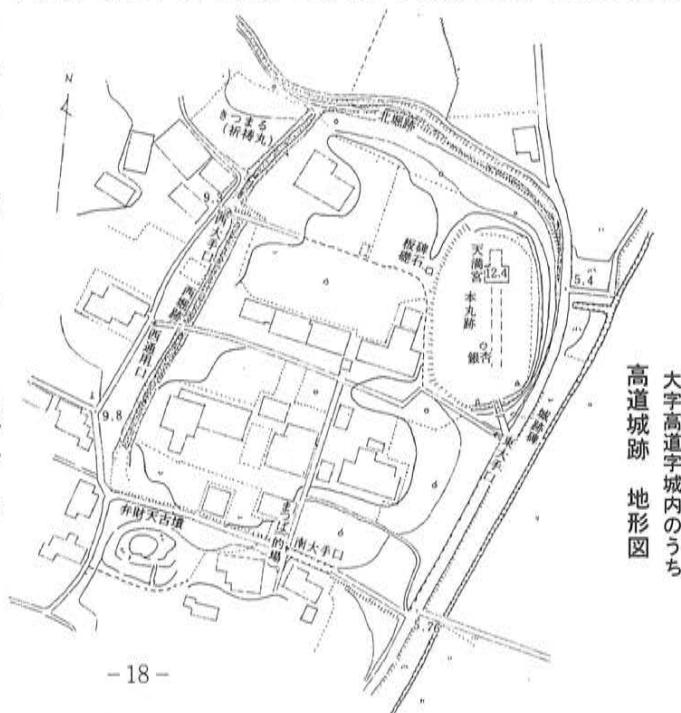
紀国隆が地頭職に補任された大野別符250町とは、大体現玉名市の秋丸・繁根木・永徳寺・河崎・立願寺・岩崎・中村・亀甲(旧高瀬町と旧弥富村)、築地・山田・中尾(旧築山村)、滑石・小浜(旧滑石村)と、現岱明町の野口・土器屋・中程・下村・前原・上村・友田・古閑・開田・山下・高道・頭波下・浜田・鍋・扇崎など28カ村、現在繁根木八幡宮に節頭を奉仕する区域であったろう。が一部は他氏の領となつていった。

紀国隆の3男秀隆は惣領職を継ぎ、大字開田字日嶽201.3ヘクタールに鶴城を、南方字箱崎92ヘクタール(古城)に亀城を築き、大字上字馬場ノ原に居館(上村城)を構え、今の睦合・下村・鍋方面を領知し、子孫の小次郎ぐにたかや伊勢守紀光隆は一族を率いて幾度か戦った。紀国隆の長男時隆は高瀬・中村を領した。次男国秀は築地方面を分与されたので、長男国成に上築地、3男秀親に前原等3村、次男幸親に下築地を与えた。幸親の次男幸長は次男重幸に野口を、長男幸経に高道を与えた。この幸経が、居館を現在の要害に定め、戦時の城としたので、城内の字名が残つたものであろう。

すなわち、大字高道の台地東端に、地形を利用し、西は空濠、北は水濠(用水)、東と南は道路。北と東が崖となった本丸跡には今天満官が建ち、的場・祈祷丸の名も残る。東西112ヘクタール、南北162ヘクタールのこの区域には現在9戸ほどが住む。南西中の町道は最近拡張された。石段登り口右手に「高道城址」の記念碑が立ち、郷土史家故中川齋氏の大野氏の忠節を称えた撰文を刻む。

伊勢守紀光隆の死後4年め、足利幕府方今川了俊の弟仲秋は、高道城・繁根木城・伊倉城を攻め、そのあと菊池氏本城限府城を落去させた。のち南北朝は合体し、室町時代に入る。戦国時代の1550年頃には、肥後を含めた北部九州は、豊後大友義鎮が支配するが、大友氏が薩摩の島津義久に大敗すると、肥前の龍造寺隆信が進出してくる。天正7年(1579)4月に、日嶽城主大野弾正少弼紀親祐は隆信に対し、違背あるまじき

旨の起請文を差し出したが、同9年3月には、多分龍造寺の麾下となつた小代親忠と金山原で戦って敗れ、前原宗玄は、焼石原にて討死。高道城は主水貞胤が守つたが、前原道富、築地隆信ともここで戦死し落城する。日嶽鶴城・亀城・上村城・下村城・前原館・築地館・中村館なども落ち、地頭大野氏は滅び、一部は民間に隠れた。この年12月には大野別符200町を龍造寺政家が小代親忠(親伝)に領知させた文書がある。



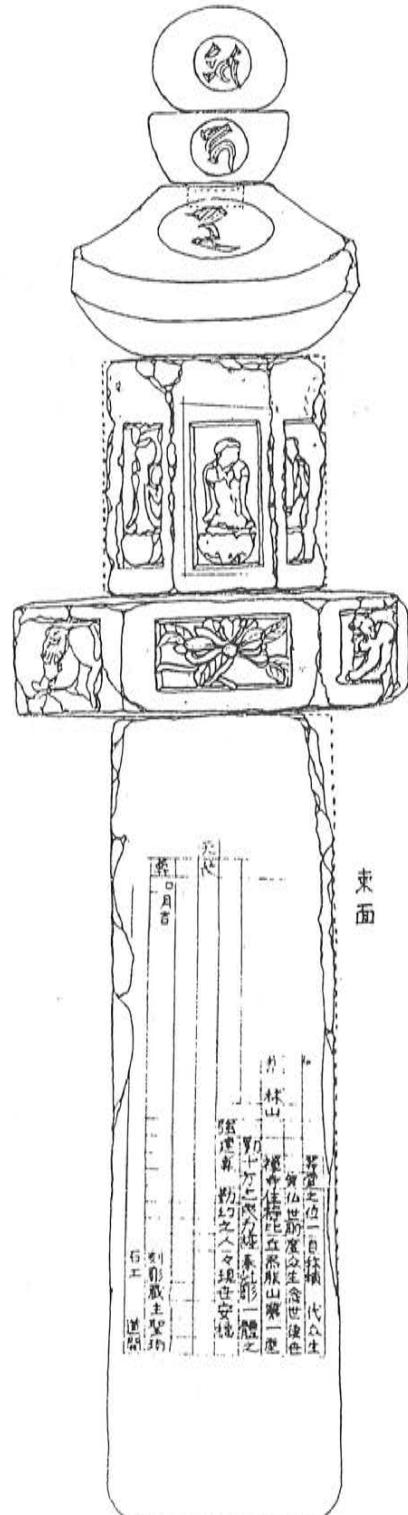
なか ど ろく じ ぞうせきどう 3・中土の六地蔵石幢 1基 (有形文化財 建造物)

「村のはずれのお地蔵さんは いつもにこにこ見てござる」
 「笛の番してござる地蔵哉 一茶」と人々に親しまれる地蔵は、
 集落の入口や三叉路に、本町内では約40軒を祀る。

地蔵はもと土地を所蔵する者という意味のインドの神であったが、仏教に入って菩薩の地位を与えられた。その姿は、他の菩薩とちがって、頭は出家僧のように丸め、普通左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、袈裟を身につけている。村落の幸せを守り、外部から悪霊が入るのを防ぎ、また延命・子育て・身代り・とげ抜きなどの利益を与えて下さる。特に子供を守る働きが強い。早死にした子供が、冥途の途中の賽の河原で、「一重積んでは父の為、二重積んでは母様と」と石を積んでいると、鬼が来て突き崩してしまう所へ地蔵菩薩が現れて、子供を衣の内に抱き入れるという。そこで亡き子が日常使った赤いよだれかけを掛け、子供の冥福を祈るのである。現世利益だけでなく、このように死者の救済もすると信ぜられるので、水子の菩提や交通事故の犠牲者のために今も地蔵像を造立する。地蔵菩薩の縁日は毎月24日、1月や8月に地蔵さん祭りや地蔵盆を行ない供養する。

町中央公民館のほぼ北、大字中土寺ノ前の農道の三叉路のこの六地蔵石幢は、凝灰岩の総高265センチ。下から、1・基礎、2・竿(幢身)、高さ143センチ、幅43センチの正4角柱で、3面に罫線を引いて刻んだ銘文は、風化していて少ししか読めない。3・中台、高さ20センチ、幅36センチの横長の6面体の各面に、牡丹・唐獅子・蓮華・夫婦唐獅子・牡丹・唐獅子を、極めて優雅に深々と浮き彫る。4・龕部(塔身)、高さ42センチ、幅18センチの正6角柱。6面に6種の地蔵(右頁)を1尊ずつ厚肉に彫るが、今は顔容も持物もひどく風化している。この龕部の上には普通右頁の写真のように、笠と宝珠が載るのだが、ここでは失なわれていて、何処かの五輪塔から、5・火輪、6・風輪、7・空輪(計高さ60センチ)を持って来て載せている。

消えかかった竿(幢身)の銘文をたどると、数名の結縁の僧尼と、刻彫藏主聖瑞・石工道開等によって、現世安穏と後世善處(次の世に阿弥陀仏のおられる浄土に生まれること)を願って、室町時代(1393~1575)中期に造立したと思われる。



中土寺ノ前六地蔵石幢 実測図
原図 縮尺=1:10 総高265センチ

じよう ろくじぞうせきどう
19・上の六地蔵石幢 1基
(有形文化財 建造物)



上長津野の六地蔵石幢

総高234セン

ろくじぞうのりんね
の六道に輪廻し、さ迷い苦しむ衆生を救うて下さるのが、地蔵菩薩だとする信仰が広まった。

そこで六道のそれぞれに6種の地蔵を配する六地蔵が日本で考え出された。名称・持物等は色々説がある。次はその1つ。

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 地獄一大定智悲地蔵—左手宝珠、右手錫杖 | 4. 修羅—清淨無垢地蔵—左手宝珠、右手梵篋 |
| 2. 餓鬼一大徳清淨地蔵—左手宝珠、右手与願印 | 5. 人道—大清淨地蔵—左手宝珠、右手施無畏 |
| 3. 畜生—大光明地蔵—左手宝珠、右手如意 | 6. 天道—大堅固地蔵—左手宝珠、右手經冊 |

この1尊ずつを6石に刻んで、6つの石地蔵を並べてまつるのも六地蔵（例、玉名市大覚寺内）。6尊を1石の6面に刻んだのが六地蔵石幢である。幢はもと仏堂内に掛ける旗のこと。石幢とは普通、旗のような6面をもつ石造柱の竿の上に笠だけ載せたもの（単制）と、ここで述べる六地蔵石幢のように6段からなる複制（重制）とある。石造物にはこの他に、石燈（灯）籠・無縫塔・笠塔婆・板碑・五輪塔（次頁）・宝篋印塔・宝塔・多宝塔・層塔等と分類され、仏教だけでなく民間信仰の歴史を知る上で貴重なものとなっている。また石造美術工芸品としても研究し保存されている。六地蔵は熊本県内に約400基あるという。

にしなか ど ごりんとうぐん
27・西中土五輪塔群 (2基・断片3個)

(有形文化財 建造物)



西中土五輪塔群のうち中央塔
南東より写す

大字中土字四郎丸の西中土神社の北西隅に、1段高く築かれた「小山家先祖代々之墓」の墓石のすぐ背後にある。中央の塔は、右ページ田端地蔵堂前の五輪塔より大きく、横幅広く、ずんぐりしている。高さ136センチ。各輪の横幅や直径等を下の地輪から言えば、53・59・60・28・26センチ。各輪の中央に規定の種子を薬研彫り（底をV字型に彫ること）に彫り〇（月輪）でかこむ。1番下の地輪東向きの面は本来西面が正しいので、中央に種子丸（アン）を刻み、その下に妙泉禪尼、左右上下2段に、道林禪門等12名の法名を刻む。右端に、奉造立石塔一基逆修結縁、左端に、延徳第三口口吉日と刻む。すなわち室町時代も戦国期の初め1491年（北条早雲伊豆を占領の年）、妙泉禪尼が逆修供養（生前にあらかじめ自分のために、仏事を営むこと）をし、一族の結束と後生善処を祈念して造立したのである。

この塔の左手南側に立つ五輪塔は高さ80センチと小型。地輪・水輪に種子が見える。北側に地輪・水輪の2輪だけがある。外に高さ20センチと27センチの風輪・空輪の1石が2個ある。普通この2輪は1石に刻るので、五輪塔は4石から成ることになる。

密教で説く宇宙の構成要素五大は、地・水・火・風・空。このそれぞれを、方形・円形・三角形・半月形・団形で現わし、塔の形に積み上げたものが五輪塔。下から地輪・水輪・火輪・風輪・空輪と呼ぶ。基礎・

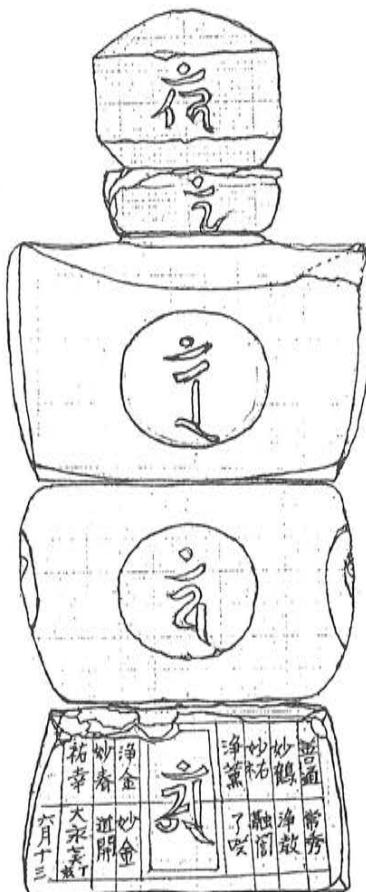
塔身・笠・請花・宝珠と呼ぶこともある。平安時代末期に石塔として造られ、鎌倉中期以後は各宗派に取り上げられ全国に広まった。石造が最も多いが、金属・木材も用いる。堂塔落成や仏像の開眼記念・墓標・死者の追善供養・現世安隱・未来への逆修供養のため建てられるようになった。各輪の4面に規定の5大種子（右頁）を刻む。地輪に紀年銘や人物名や銘文を刻んだものは、地方史研究の上で特に重視される。17頁大野伊勢守紀光隆墓の五輪塔のように。

玉名郡玉東町西安寺の、山北郷地頭相良氏鎌倉時代の五輪塔3基は、造形的に優秀で、特に正嘉元年（1257）塔の堂々たる風格は、九州五輪塔の白眉とされる。玉名市築地蓮華院誕生寺前の2基は高さ263センチと265センチ、巨大である。野原莊地頭小代氏の菩提寺荒尾市淨業寺には、鎌倉3代塔と伝える塔をはじめ、小代氏関係50余基、銘のあるもの26基、その他多数の五輪塔が残っている。



中央塔地輪の種子と銘 拓影

おおのしもたばたじぞうどうまえごりんとう
11・大野下田端地蔵堂前五輪塔 1基
 (有形文化財 建造物)



大野下田端五輪塔実測図（西面）

原図 S=1:10 総高134センチ

大字大野下字田端のほぼ中央、水田越しに大野下東公民館が近い地蔵堂前に解体集積してあった中から、大きな水輪2個は、地蔵堂境内石段左手に残し、石段右手に復元整備したものがこれである。総高134センチのこの五輪塔の特徴は、火輪（笠）の軒先の張り出しがほとんどない代わりに、厚さが極端に分厚く造られている。笠の西面で上幅55センチ、下幅45センチ、うすい所で厚さ29.5センチ。また地輪の各面は上幅が狭くなっていて、台形をなす。

五輪各層の4面には、五輪塔規定ともいべき、五大種子計20字を刻む。但し3字欠損。左の実測図は西面を写すので、種子は下から、アン、バン、ラン、カン、キヤンと読む。地輪中央の孔アは、無量寿如来または普賢菩薩を現わす。この孔の右側上下に善通など8名、左側には浄金など5名の法名と、大永七天丁亥六月十三と刻む。造立の趣旨は刻んでないが、多分生前に自分の供養をした逆修塔であろう。この年1527年は、左貢西中土神社五輪塔より36年あとの、室町時代戦国動乱期のまん中頃に当たる。

古代インドでは、天地間の森羅万象すべてを、地・水・火・風・空の五大要素に基づくと考え、あらゆる事物・現象を五大に配当した。この考えが密教にとり入れられて、東西南北の方位ごとに変化させた種子が左下の表で、五輪塔の各輪の4面に、それぞれの種子を刻む。小型の場合には刻まない例も多い。

種子（種子字を略して種字とも書くが種子が正しい）とは、礼拝の対象となる諸仏諸尊を1つの梵字（古代インドの表音文字）で象徴標示したもの。地輪東面の孔アは、胎藏界大日如来その他諸仏の種子。孔アに空点（孔ア）と莊嚴点（孔ア）を付けた西面の孔アンは前段に述べた。孔に修行点（孔ア）を付けたのが南面の孔アで開敷華王如来他、涅槃点（孔ア）を付けたのが北面の孔アで、天鼓雷音如来や不空成就如来や他の種子というふうである。

種子は、1尊に1種子とは限らず、1尊で数種をもち、又1種子が数尊に共通する場合もあるので、その種子が、何尊を指すかわからぬ場合は、その場の状況で判断する。

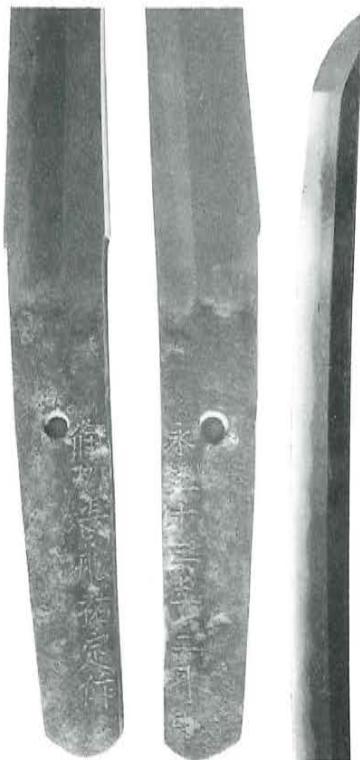
種子は如来・菩薩・明王・天などを象徴し信仰礼拝されるので、仏像と同様に端麗莊厳に、美しく、梵字独特の書き方で刻まれている。34頁僧豪潮が梵字で書いた宝篋印陀羅尼も残っている。玉名市青木の熊野座神社境内の岩壁中腹には、長さ190、幅140センチの不動尊をあらわす梵字や、阿弥陀三尊等を現わす梵字群がある。

発心門	修行門	菩提門	涅槃門
東	南	西	北

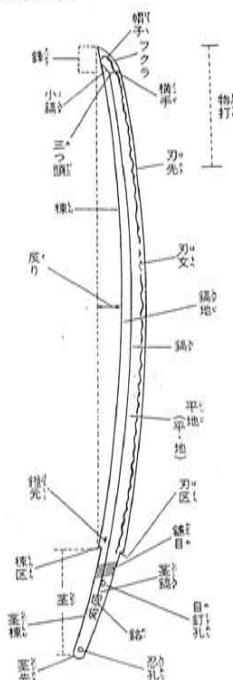
五輪塔4面の種子

『熊本県文化財パンフレット』より

わきざし びしゅうおさふねすけさださく しらさや ふり
9・脇差備州長船祐定作(白鞘) 1振
 (有形文化財 工芸)



左 中心表銘「備州長船祐定作」
 中 中心裏銘「永正十三年二月日」
 右 刀身先表



太刀各部の名称

『甲冑と刀剣』より

日本刀の初めは、反りのない直刀（大刀）であったが、平安中期以後は、腰につるす（佩く）反りをもった太刀となった。身につける場合刃を下にし、外側（表）に銘がくる。

鎌倉時代になり、山城国・大和国・備前国・相模国・伯耆国に、それぞれ著名な刀工が相次いで現れ、刀剣界の黄金時代をつくった。室町時代になり、太刀にかわって打刀（単に刀ともいう）が作られた。打刀は腰の帯の間に斜めに差し、腰から一動作で抜けるように寸法も短くなった。

打刀は長さ60センチ以上を言い、身につける場合太刀と反対に刃を上にした。銘は外側（表）にくる。拵（刀剣の外装、造りともいう）も、打刀拵となり、小柄、笄をつける。安土桃山・江戸時代には、刀とそれより短い脇差（30～60センチ）を組み合わせ、同じ意匠・金具をつけた大小2本が武士の間に流行した。

さて、この脇差は、鎌造り、庵棟、中切先。室町期の代表的な刀姿で、腰元で反り、更に先反りが強い。長さ53.9センチ、反り1.9センチ、鍔えは小板目肌よく詰み、地沸づく。刃文（焼入れによって刃先部にできる文様）は焼巾広く、匂本位の腰の開いた互の目丁子乱をゆつたりと焼き（蟹の爪乱と称する）、中心（茎）は生ぶ、刃上りの栗尻。鍔目は切りか、はつきりしない。目釘孔1。中心棟寄りに、備州長船祐定作と7字の表銘。裏銘は、永正十三年二月日と切る。永正13年（1516）は室町時代戦国期のほぼ中頃。伊勢の村正、濃州兼定・兼元（孫六）、相州綱広が活躍した頃である。

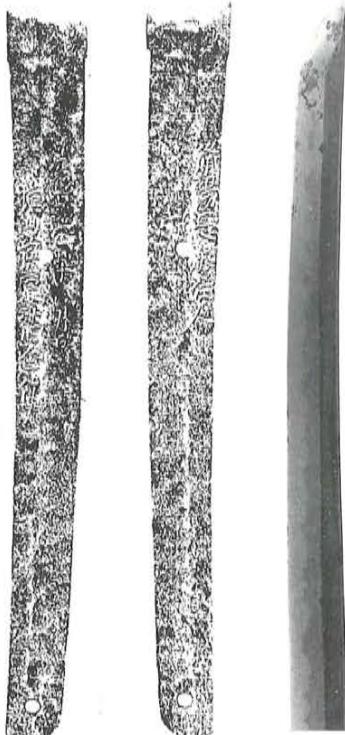
備前刀の室町中期応仁以降のものを末備前と称し、数打ちといつて粗悪刀も多いが、祐定は、末備前の中で世に知られる代表的刀工で優れた作刀を多く残している。この脇差は、白鞘に収められている。古刀期に属する。

刀剣の製作年代は、次の様に分けられる。

1. 古刀……平安後期より文禄4年（1595）まで。
2. 新刀……慶長元年（1596）より宝曆13年（1763）まで。
3. 新々刀……明和元年（1764）より慶應3年（1867）まで。
4. 現代刀……明治以降より現代まで（明治9年（1876）に廢刀令が出ている）。

8・太刀横山藤原祐包作(拵付)

1振 (有形文化財 工芸)



太刀横山藤原祐包作

左 中心表銘拓影「横山藤原祐包作
安政六年八月日」

中 中心裏銘拓影「備陽長船住人」

右 刀身先裏

この太刀の特徴は、長さ86.6センチメートル、反り2.7センチメートル、鎬造り庵棟、応永備前に見える姿で、身巾狭く優しい姿、腰反りで、先が程よく細り、平肉少なく重ねは厚く、切先は詰まる。鍛えは、小板目よく詰み一面に沸づく。刀文は、腰元に湾れ直刀を焼き、上は丁子乱れ華やかで(重花丁子風)、鉈子は、表はきかけ小丸に返り、裏小丸に返る。中心(茎)は生ぶで、刃上りの栗尻。鏡目は勝手下り、目釘孔2。銘は表に、横山藤原祐包作、安政六年八月日、裏に、備陽長船住人である。安政六年(1859)は、江戸末期、桜田門外の変の前年で、この太刀は新々刀期に属する。祐包は横山祐盛養子、横山俊吉で、後、俊左衛門と称し、古備前友成58代孫、与三左衛門祐定13代目という。備前新々刀期の代表的刀工である。

拵は、総朱塗の素鞘に細い革ひもを平巻にした上に、一対の金銀赤銅細工の柱掛花器に菊をさした模様を刻む目貫を飾る柄に、松を透し彫した肥後鐔をつけ、更に太刀両端の、柄頭の当り柄と鐔は共に、金象嵌の唐草模様の肥後の金具を飾り、華やかさをかもし出している。

日本刀の特徴である、折れず曲がらず、よく切れるためには、刀剣の表面となる皮鉄をよく鍛え、これで、よく鍛えられたやわらかい心鉄を包み、火に入れて打ち延ばし、これを繰り返して大体の形を造り上げ、大槌・小槌で形造りをする。次に刀全体に焼刃土を地部に厚く、刃部に薄く塗る(これで、刀文が決まる)。これを焼き上げて水に入れ(焼入れ)、研師の手に渡す。この間に、日本刀特有の強さや、美しい地金が出来る。素材の鍛え方によって、梨子地肌、柾目肌、板目肌、杢目肌などの流派の特徴が出る。焼入れによって出来る刀文は、直刃と乱刃に大別される。乱刃の中の小乱、丁子乱、互の目乱その他多くの変化を刀姿と共に鑑賞し、又、鑑定する。

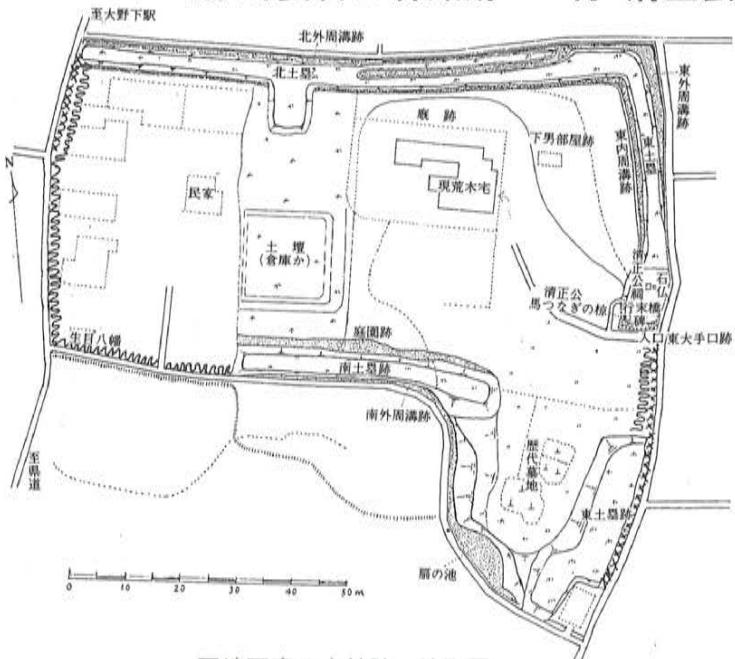
肥後では、古刀期に菊池氏が山城国より、来派の延寿太郎国村を招いた。これが延寿派で菊池氏の興亡と盛衰を共にし、室町期まで命脈は続いた。この分派に石貫派、同田貫派があり、古刀末期から新刀期にかけて作刀した。その中に、加藤清正の保護を受け、亀甲に小山上野介正国、伊倉に木下左馬介清国が鍛刀したという。この同田貫は「兜割り正国」で知られる様に、優美ではないが武用刀として知られた。同田貫は新々刀期に復興し、10代宗広は、天保6年(1835)繁根本八幡宮に作刀を奉納しており、県指定文化財となっている。



太刀祐包作 拙
柄、裏

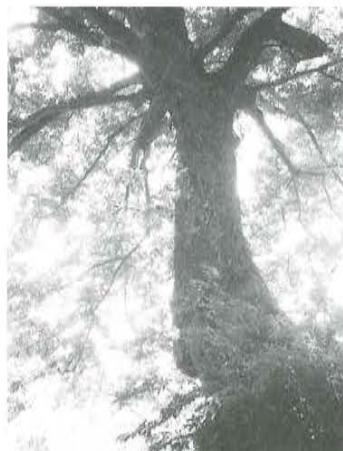
14・扇崎要害の森館跡 付 清正公馬つなぎの椋 1株

(史跡 城館跡)

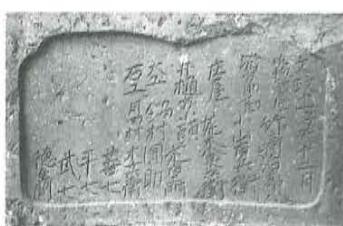


扇崎要害の森館跡 地形図

明治8年地租改正地引絵図には、周溝(×××××)と、
土壠(~~~~~)がなお上図のようにある。



清正公馬つなぎの椋



行末川眼鏡橋の要石

工事関係者名右より3人め、
庄屋荒木八良兵衛とある。

おうぎさきようがい もりやかたあと
つけたりきよまさこううま むく かぶ

みょうじんお
大字扇崎字明神尾集落のほぼ中央
のこの遺構は、竹や雑木の茂った、
高さ約2、幅7~10mの土壠や周溝
をめぐらす。およそ東辺110、北辺130、
西辺55mで、南辺は内側に弯曲して
外に扇の池がある。(扇崎の地名の起
こりという)。周囲の町道は近年整備
された。南西隅の生目八幡より北の
民家一帯は史跡指定外。

『玉名郡誌』に、今より七百年の
昔、近江源氏佐々木の一族北垣左京
(宇多天皇より出、もと近江国に居
た佐々木4兄弟は源頼朝挙兵前より
の功臣。長兄定綱は16頁に出る中原
親能と共に京都守護をした事があり、
末弟高綱は宇治川先陣争いで有名)。

菊池郡合志氏はこの後裔。北垣姓は不詳。)が帝都を去り、肥後国飽田
郡池田の郷松尾村梅洞(現熊本市松尾町)に住み、後この扇崎村に移
り、四周を掘り、土井を築き、第宅を構え、自ら要害の森と称したと
述べているように、ここは、中世鎌倉時代の土豪(地頭・莊官の武士
化した地主)の屋敷地であったろう。(普通は、館・土居・堀の内・
城の内・陣内などとも呼んだ。いざ戦いとなれば城砦に変わる構えで、
所從=郎党・下人を近くに住まわせていた。)左上地形図の東辺入口
の右手やや高い処は、偵察や射撃用の櫓台であろうか。ここを入れば、
今は母家(荒木氏住宅)の外、下男部屋跡、廻園跡、又倉庫跡らしい微
高の土壠(15×18m)や墓地があって広い。

『肥後国誌』等には、北垣左京のあと子孫居ること數十代、三百年
の昔に、肥後の領主となった加藤清正公が姓を荒木と改めさせ、この
森を筑後三池口の押さえとしたと記す。南辺の道路はもと、田原坂よ
り行末塘を通る長洲往還であった。

東辺入口右手櫓台上には現在、清正公石祠と、清正公馬つなぎの椋
と、行末塘眼鏡橋の要石があり、清正公とのゆかりを今も、身近に物
語っている(右頁)。

たいこうしゆいんけいちょう えきにんずうづけ りやつき おのおの つう
15・太閤朱印慶長の役人数附付略記 各1通
 (有形文化財 古記録)

かんぱくだいじょうだいじんとよみひでよし 関白太政大臣豊臣秀吉は、対明貿易を復活させようとして、朝鮮の來貢を求めたが、きかれなかったので、天正20年(1592、12月文禄と改元)3月、158,700人の兵力を以て朝鮮へ出兵した(文禄の役)。その後和議は成功せず、慶長元年(1596)9月、秀吉は再度の出兵に決し、翌年2月20日に出征諸将の部署を定めた。この度の慶長の役は、同3年8月秀吉の死去によって、全軍撤収することになった。

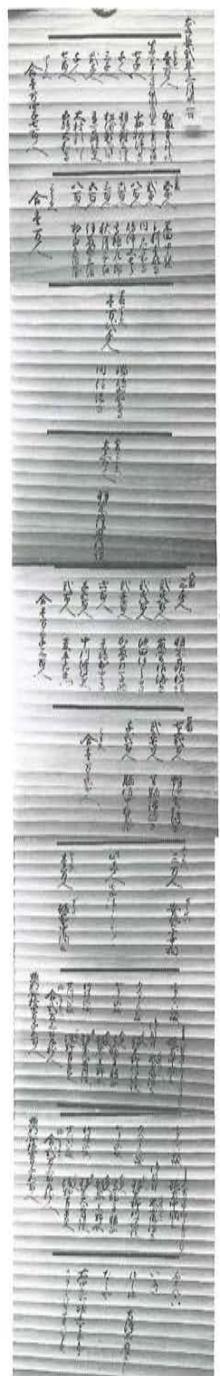
慶長2年2月21日の日付の下に、秀吉の朱印を押した(貼紙)人数附が左頁の荒木家に所蔵されている。縦322^{ミリ}を9段に区切って、38人の大名の兵力部署を記す。総勢141,500人。加藤清正10,000人と小西行長7,000人は、先手2日替に先鋒とある。この豊臣秀吉高麗陣陣立書ともいう原本は、浅野幸長(和歌山藩主)家に所蔵され、『大日本古文書』家わけ第2に収録されている。その写であろうが、何故荒木家にあるのか。由来を同家所蔵の『略記』には、「天正年間清正公は、折地村(現長洲町)と扇崎村の狭隘部に堤塘を築かせ、自分は限本から馬に乗って来て、先祖村吏荒木八郎兵衛宅に休泊した。馬は屋敷入口の棕の木につないだ。30日で潮留ができる、104町7反歩の新田が開発された。清正公は行末繁栄すべしと行末塘と名付け、八郎兵衛に太閤朱印の朝鮮征伐人数附と新田3町歩余を恩賞として与えた。これより14代、家宝として持ち伝えている。」と、明治8年(1875)4月荒木八弥(旧名八郎兵衛)が記録している。

行末塘新墾の年は、『長洲町史』所収、館(腹赤)村庄屋古庄九郎左衛門覚書の、「慶長九年 殿様扇崎原賀(腹赤)之間ニ行末と申所エ塘御築立」が正しく、清正公慶長の役帰還後8年め1604年の事であろう。

県立図書館蔵『戸籍先祖帳』には、初代八郎右衛門天明4年(1784)無苗、郡代直触。養子八十九(のち八郎兵衛)は苗字と刀御免、地土。伴八郎右衛門(八弥の父)郡代直触、扇崎庄屋。この時朝鮮御陳の人数附を藩公尊覧のため差し出したが、行先知れずとなり返却されなかつたとある。

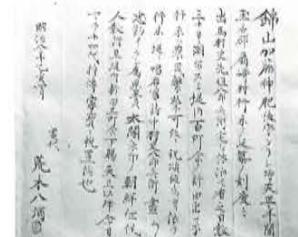
玉名郡代中村庄右衛門(恕齋)の日記、文久3年(1863)7月6日の項に、庄屋八郎右衛門の話として、「清正公行末の塘御普請の節、(中略)段段拝領物仕り、朝鮮御陳の御人組の御書付をも頂戴いたし、御鞍をも頂戴いたし居り、右御書付本書は御次へ出し候て未だ御返し無之」とあり、写を拝見したと記す。現存のはその後返却されたものであろう。

行末塘の行末川には、文政11年(1828)12月、石造單一アーチの眼鏡橋が架けられたが、川幅と県道改修のため隣接の石井樋水門と共に解体され、昭和40年7月に現在の行末橋となった。眼鏡橋アーチ中央の要石だけ、現荒木家屋敷入口右手櫓台に移され保存され、庄屋荒木八良兵衛(旧名八十九)と名も刻まれている(左頁)。



慶長の役人数附

322×51.3^{ミリ}



略記 36×51.2^{ミリ}

あんようじ あみださんぞんぞう
20・安養寺の阿弥陀三尊像（3躯） てんぱうりんどうへんがく
 付転法輪堂扁額 1面
 (有形文化財 彫刻・古記録)



安養寺の阿弥陀三尊像

中尊像高38センチ

のうえ つうけん じようほんじよりょう みだじょういん
 紗衣は通肩に着け、両手は上品上生の阿弥陀定印に結び、八重の
 蓮華座（江戸時代文化5年の作）上に結跏趺坐する。

さようじかんぜおんほさつ せいし
 右脇侍觀世音菩薩は像高41センチ、左脇侍勢至菩薩は38センチで、両手の位置は
 逆だが、ほぼ同形。頭に宝冠をいただき、童顔、胸に飾りをつけ、膝をわ
 ざかに折り曲げる様にした立像である。三尊を収める厨子の底には「文化
 五戊辰四月再興繁根木山豪潮記」と墨書銘があるが、厨子だけでなく、
 両菩薩や中尊台座も豪潮の肝煎りで、この頃再興されたのであろう。

三尊像は嘗て安養寺境内に聳えていた1階2層の転法輪堂（經堂）の本
 尊で、堂が腐朽し解体されたので、現在は門徒会館内に安置する。堂に掲
 げてあった木製扁額も同じく保存され、表に「願王 二品親王盈仁手書」、
 裏に肥後州玉名郡涌出山安養寺転法輪堂額記として、当山は源信僧都の法
 弟宿嚴僧都による長和二年癸丑（1013、平安中期）の開基で、源信僧都
 一刀三札の作阿彌陀尊を奉安すること、及び寛政11年（1799）豪潮が光格天
 皇の命に依り戒を説き、京都積善院に留まっていた頃いただいた聖護院宮
 盈仁二品親王手書願王の2大字を額に彫刻し、文化2年（1805）にこの堂
 に掲げた旨、繁根木楞嚴院遍照金剛豪潮記と刻む。寺伝にもこの事を述べ、
 宿嚴僧都は尊像を背に負うて來たと言う。



金泥「願王」の扁額

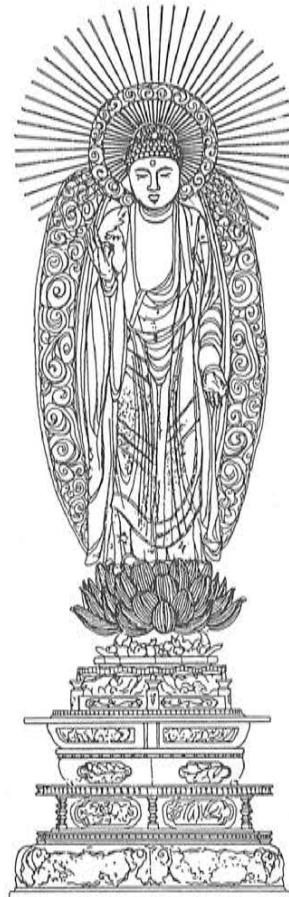
79.7×32センチ

源信（942～1017、恵心僧都・横川僧都とも言う）は浄土真宗7高僧の1人。博学で多くの著書の中でも『往生要集』は、西方十万億土の彼方にある阿彌陀仏の極楽浄土を尊ぶべき証拠をあげ、念佛の方法を細かに説いたので、平安中期末法到来におびえていた人々の間に極楽浄土への信仰が広まった（20・36頁参照）。（この後の鎌倉時代に、法然・親鸞・一遍が出て阿彌陀仏を信じ念佛する新宗派をひらく。）源信は阿彌陀來迎の画や、初めて地獄変相図を描き、又阿彌陀の像を彫刻しては、慈悲真実の仏情形表に頤われ、衆庶これを尊信したと言い、伝承も生じた。

ひのかさい よせ ぎづくり
 三尊ともに桧材、寄木造、
 ぎょくがん しつばくぞう
 玉眼、漆箔像である。中尊
 の阿彌陀如来坐像は、像高
 はくけい はつきせん
 38センチ。肉髻が小振りで、髪際線
 が〔の形に波打っていること
 などから、制作年代は室町
 時代頃かと推定される。螺
 はつ 髪は小粒ながら巻き毛を現
 わし、水晶で造った肉髻珠・
 ひやくこう は
 白毫・玉眼を嵌めこむなど
 細部まで行き届いた作であ

る。紗衣は通肩に着け、両手は上品上生の阿弥陀定印に結び、八重の
 蓮華座（江戸時代文化5年の作）上に結跏趺坐する。

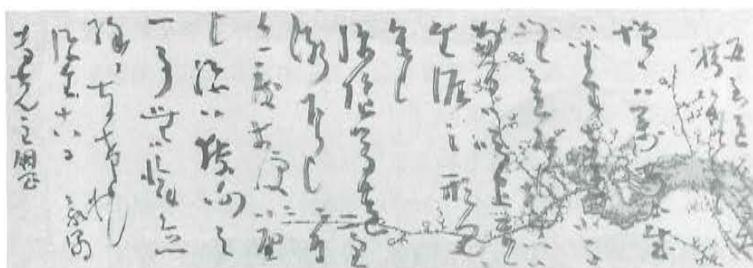
もくぞう あみだによらいりゆうぞう
32・木造阿弥陀如来立像1躯及び厨子1基 付僧豪潮添状2通
 (有形文化財 彫刻・工芸・歴史資料)



阿弥陀如来立像 実測図
 原図 S=1:1.3 像高11寸

言の葉もな	何をいゝ置	身としれは	消へなん	今もはや	とて	とて	とて	生涯の形見	昇道上人へ
し	露の	露の	の	の	豪潮	贈る	尊を	見	た

豪潮添状（解説文） 16.5×39.7cm



あと1つの豪潮添状 16.6×46.6cm

頭上のもり上がった肉髻の正面に水晶（内側に朱を塗る）を、額の中
 央白毫にも水晶を象嵌し、豊満な童顔に半眼伏目、首元に三道を刻み、
 納衣は両肩をおおい（通肩）、両手は來迎の姿を示し、蓮華座上に立つ。
 材は香木を用いた檀像である。頭髪・唇だけ採色し、納衣・蓮弁等に截金
 風に文様を金泥で描く。総高21、像高11寸と小さくはあるが、重厚典雅
 な味わいを保ち、精細綿密に刻まれている。

雲形文を浮き彫る舟型光背と輪光背、46本の放射光光背は如來の光明
 を象徴する。三重の蓮弁、敷茄子、華盤、華盤受座、樞座まで高さ10寸
 の、どれにも華麗な装飾を施して複雑多彩である。

像を納める厨子は高さ30.6寸、1辺の横幅12寸ほどの隅丸角柱形の黒漆
 仕上げ、下に台礎、上に屋蓋、軒下の8間は流水渦巻文を透し彫りする。
 屋蓋には忍冬唐草文飾り金具を3段に取り付け、中央止め金も枝菊意匠の
 金具を用いる。両開きに扉を開けば、中は金色燐然と輝く。厨子底に「赤
 尾右京作」と陰刻金字の銘がある。京都の伝統的仏師の1人、赤尾右京
 の江戸時代後期の作。他にも豪潮依頼の右京作品はいくつかある。

豪潮は、光格天皇の皇妃の大病を加持し靈験があったので、准提觀音
 像（いま名古屋長栄寺の本尊）をはじめ、幾つかの恩賞を頂戴した。そ
 の後も豪潮は盈仁親王に天台宗の奥義についてお答えするなど叡聞に達
 したので、数々の御下賜品があった。この阿弥陀像もその一つである。

豪潮がこの像を故郷の専光寺第3世、兄昇道上人へ送ったのは、文化

年間（1804～1817）60歳前後の頃と推定される。模様入り
 の料紙に草書体で書いた豪潮
 の添状2通があり、今専光寺
 に額装保存されている。「生涯
 の形見とて」恩賜の弥陀尊を
 生家へ送った豪潮の心情は、
 添状の和歌1首にあらわされ、
 切々として人を打つものがあ
 る。

外に約40通の書状も保存さ
 れ、文字の形の自由さ、独自
 の形の美しさ、魅力について
 は、豪潮の書状は抜群という。

いまいすみ もくぞうやくし によらい ざぞう
33・今泉の木造薬師如来坐像 1躯

(有形文化財 彫刻)



今泉の木造薬師如来坐像
像高60センチ

公を祀ってあったが腐朽したまま時が経ったので、境内の松の大木を売って資金とし、寛政13年(1801、享和元年)2月、福岡大宰府の仏師生田佐兵衛が高瀬町の清源寺観音堂に於いて造像し、翌年3月同寺現住大梁慈心が開眼式を行った。天保7年(1836)4月には、小田手永立花村(現天水町)仏師平井幸之進によって、明治3年(1890)には高瀬町東甚七によって採色補修を行っている。昭和51年12月にも長洲町龍修の手で採色しているので、当初の形よりどれだけが変化したのではないかと惜しまれる。

信仰の対象として仏教では普通次のように分類する。

- 1、如來 仏の尊称、悟りに達した覺者のこと。衲衣だけを身につけた出家の姿で、肉髻、螺髮・白毫をもつ。釈迦如來・阿弥陀如來・藥師如來が三大如來、外に姿の異なる大日如來。
- 2、菩薩 如來に達する前段階で、宝冠や装身具で飾られ、それぞれ持物を異にする。觀世音菩薩・聖觀音菩薩・大勢至菩薩・日光菩薩・月光菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩・十一面觀音菩薩・馬頭觀音菩薩・地藏菩薩・虛空藏菩薩・千手觀音菩薩、その他にも多い。
- 3、明王 不動明王その他、如來に仕え惡を破碎する使者として忿怒形をもつ。
- 4、天部 仏法護持の役。多聞天などの四天王、阿修羅・金剛力士・十二神將・大黒天・弁財天等。
- 5、羅漢 阿羅漢の略。釈迦の高弟や高僧など僧形のもの。十六羅漢・五百羅漢など。

睦合上字今泉の木造瓦葺薬師堂、奥上段の廊子に安置される本尊薬師如來は、人々を病気から守って下さる。群青色の頭髪には螺髮や内鬚珠はなく、額には白毫も省き、ややつり上がった伏目がちの慈眼と豊かな頬、大きく垂れた耳と浅いめの三道、肩を脱がず胸をあらわに、両手を通した衲衣は、きれいな襞をなして結跏趺坐した両膝を覆う。右手は人々に安樂無畏を施すことを象徴する施無畏印、左腿の上に置いた左手掌中の黃金色薬壺によって薬師如來である事がわかる。肌は漆黒地に金泥、衲衣は朱色で塗る。細部にとらわれない大まかな寄木造で、後世補修採色している。像高60センチと大きい。輪光背は直径38センチ、幅3センチ。台座は蓮華座・岩座・箱座の3段、高さ約50センチ。

この像の造立の由来と管理の状況は箱座の裏書銘文によってはっきりする。すなわち、古い堂(吉法<宝>寺跡か)内に薬師如來と菅原道真



扇崎鬼除の千人塚供養塔 正面（南向き）

総高205^{メートル}、碑石高150^{メートル}

13・扇崎千人塚 1基 (有形文化財 建造物)

普賢岳の火碎流で大災害が心配されつつある今年から丁度199年の昔、寛政4年壬子4月朔日暮六ツ過ぎ、新暦では、1792年5月21日午後8時頃か、肥前(長崎県)島原半島の活火山雲仙火山が大噴火し、溶岩流の噴出とともに、東方眉山(819^{メートル})の天狗山東半分の大崩壊がおこり、山体は裂け、噴出した熱水と共に大地すべりとなり、東に向かった莫大な量の土石流によって、山麓や海は土砂に覆われ、海岸線は870^{メートル}にも沖合に移り、59の島が出来るほど地形が変わった。有明海を東へ15~20^{キロメートル}へだてた玉名・

飽田・宇土や天草の海岸には、3度の大津波(2度目が最高で約10^{メートル})が打ち寄せた。死者は、一説では玉名郡2,221人、飽田郡1,166人、宇土郡1,266人、天草343人、計4,996人(島原藩を入れ総計14,537人)。その他、怪我人、馬の溺死、家屋や漁舟の流失破損、堤塘・井樋の破壊、田畠・塩浜の荒廃など未曾有の大灾害は、「島原大変・肥後迷惑」の言葉を生んだ。

被害を岱明町だけについて言えば、下沖州村(新浜)は死人380人、怪我人100人余、流家150軒余、流馬14疋、田畠塩浜等損所多し。此村も所を改替て以前の所より3~4丁上に扇崎村の中に直る。医師・御家人等多し、残らず流失せり。鍋村の内塩屋80軒余の所残らず流失せり。死人350人、怪我人136人、流馬10余疋、畠塩浜損所多し。浜田・高道・滑石・小浜の村々9人10人宛の溺死あり。人家には失なし。田畠塘筋破損多し(『両肥大変録』下に拠る)。村々の庄屋をはじめ寺は、死者を樽や桶に入れ、或いは古衣、はては筵に包んで埋葬した。生存者には、粥や握り飯を炊き出し、寝所を提供することに努めた。肥後藩も災民の救助に力を尽くし、食料・農具を給与した。9月藩は3郡の、飽田郡下松尾村(現熊本市小島下町)、宇土郡戸口浦村(現宇土市戸口町)と、ここ玉名郡扇崎村鬼除にほぼ同様な碑文の供養塔を建て死者を弔った。

供養塔正面に「南無阿弥陀佛」と大書し、あと3面14行に次の文を縦に刻んである。

ことし寛政四の年壬子正月より肥前国温泉の嶽煙たち炎火日に月に熾にしておなしき四月一日の夜山くつれて海に入うしほわきあふれて我国飽田宇土玉名三郡の浦々に及び良民溺れ死する者玉名郡に二千二百餘人飽田宇土をあはせ四千数百余人たまたま活のこりたるも父母をうしなひ或は老たるか子むまこにおくれて泣きさまよふあわれといふもさらなりかゝる事はふるき史にもまれなることになん夫民は國の本なりとて同しき六月に官より僧に命して追福の事を修せしめその九月に一郡に一基の塔を建られ死者の名を錄してこゝに納め幽魂を鎮めしむ死者もししる事あらは千年の後までも死して朽ちすとおもふなるへし

地元老人会は、今も毎年4月1日に僧を招いて供養を行ない、また除草や整備に奉仕している。

なかしまけこうぼうだいしせんこくがぞうせきどう
35・中島家弘法大師線刻画像石幢 1基
 (有形文化財 建造物)

溶結凝灰岩 正8角柱、高さ209セン、横幅16.5センの8面に、それぞれ弘法大師画像(御影)を縦に11体ずつ、計88体を陰刻する。縦18セン、横15センの1単位の大師御影は、真如親王(51代平城天皇第3皇子、空海10大弟子の1人)によって描かれ、弘法大師自ら点睛したと伝えられる高野山御影堂所蔵の画像(真如様と称する)を元としたものである。すぐれた相貌の大師は4脚の曲象の上に座禅を組み、やや右を向くお顔を左から写し、右手に密教の法具三鉢杵を、左手に数珠を持つ。曲象の前方下に木履を置き、左側下に水瓶をおく。

全国的に珍しいこの石幢は、中島家の先祖が四国88カ所遍路の折、阿波国(徳島県)で入手し、鍋の洲崎港まで船で運び、鍋立山734番地に建立したのを、昭和40年、約200年前の現在地へ転居にともない移築したものと言う。中台正面に縦4行、「文政六年四月吉日 先祖為菩提 奉納大乘妙典

鍋村作之丞」、左侧面に「櫟野村 石工 嘉平次 淳久」と刻む。江戸後期1823年、作之丞は大乘妙典(現在は多く般若心経を写経するが、ここではたぶん妙法蓮華経=法華経であろう)を写経して塔内に収納し、先祖の冥福を祈ったのである。

四国88カ所靈場(札所)については、弘法大師ご自身が開いたように伝えるが、実は、青年時代修行された大滝山(香川・徳島県境)、室戸岬(高知県)、石鎚山(愛媛県)と、ご誕生地讃岐国善通寺(香川県)を結んで、海岸線沿いの、四国を1周する1つの巡路が浮かび上がり、その巡路に後世点々と寺が建ち、最後に現在の88カ寺に落ちついたと思われる。88カ寺の札所を巡拝する者を普通遍路といふ。(西国33カ所を巡る者は巡礼。)遍路の多くは白衣で、同行二人と書いた菅笠と、大師の御手として必ず右手に金剛杖を持つ。「南無大師遍照金剛」と、唱えながら、今も遍路は絶えることがない。

弘法大師は死後のおくり名、遍照金剛を密号とする空海(774~835)の伝記ははっきりしない。平安時代の始め、比叡山延暦寺に天台宗をおこした伝教大師最澄と前後し、空海は密教を学問的に理論づけた真言宗をひらいた。空海は若くして密教(秘密の呪法を通じて仏の世界に接することにより、悟りを開こうとする教え)に傾倒し、石鎚山など靈地自然の中で苦行した。中国唐に渡って密教を学び、のち京都の東寺と高野山の金剛峰寺(和歌山県)を密教の中心道場とした。

中台に刻銘の石工2人は、櫟野村(現大牟田市内)の人。櫟野石工の手になる鳥居・狛犬・燈籠など28基が、本町内の神社に見られる。



弘法大師線刻画像石幢実測図
 原図S=1:10 幢身高216セン
 基台高55.4セン



1単位の弘法大師画像

18.0×15.0セン 拓本・池上直

はすわけ しょぞうひんいつかつ
29・蓮澤家所藏品一括 (23点)
 (有形文化財 工芸・歴史資料)



1. 小代焼

①散白盆形双耳盤



2. 古伊万里焼

②上左右 色絵山水綾文鉢
下 色絵山水文鉢



3. 南京焼 ③色絵隅丸角形茶瓶と豪潮銘の桐箱



4. 平戸焼 ④白磁文鎮



6. 豪潮使用の筆と墨

⑤右端は御下賜の墨

1. 小代焼 (4点) 加藤清正、一説に細川忠利の頃より、小岱山麓の南関手永宮尾村で焼かれ、笹灰を主とした釉薬で青と白のにじんだ風雅な趣を出す。左写真①は浅い盆の形で縁の外に耳を付ける。他に尖底盃 (2点) は「そらぎゅう」とか「馬上盃」とか言う。あと1対2個の小壺を固定した容器1点がある。

2. 古伊万里焼 (4点) 佐賀の有田焼。伊万里港で集散した磁器。赤絵付の名工酒井柿右衛門が有名。写真②の3点は底の円内に山水を描き、まわりの円にも人物・菊花等を配し、綾形文様でつなぎ、赤・青・緑・黄・白の華やかな色で仕上げた鉢。写真下は筒形。外に色絵台付鉢1点。

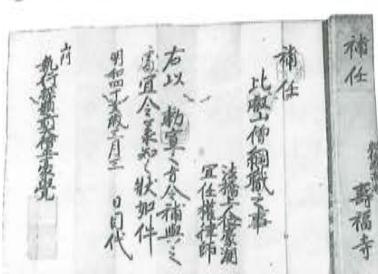
3. 南京焼 (3点) 中国南京で清朝 (1616~1912) 時代に焼いた磁器。写真③桐箱に「南京焼 茶瓶」「文化紀元甲子初夏贈専光主人 豪潮」と記す。1804年豪潮が56歳の時、長崎から兄昇道上人に送(贈)ったもの。外に色絵蓋付丸型小壺、蓋付南瓜形竜花文水注各1点がある。

4. 平戸焼 (1点) 写真④、2輪の白菊の付いた枝を白紙で束ねた図柄の白磁文鎮。

5. 伽羅 (断片1点) 写真略。粉末を香爐で焚き香りを鑑賞する。「享和帝 賜 伽羅屑」と銘があり光格天皇の御下賜品。

6. 毛筆 (6本)、唐墨 (1点) 写真⑤。墨は御下賜品。豪潮没後生家へ送られた。

7. 補任状 (3通) 豪潮は比叡山で精励修学の結果、明和4年 (1767) 3月、19歳で権律師に任せられ (補任状写真⑥)、翌年8月法眼和尚位に (補任状写真略)、同6年9月権少僧都に (補任状玉名市個人蔵)、同8年6月傳燈大法師位に累進した (放請状写真略)。この後も高い位階に進む事が出来たであろうが、安永5年 (1776) 年、師豪旭の逝去に遭つて寿福寺を嗣いだ。



7. 権律師補任状

⑥明和4年 (1767)

ちゅうぐうご しょおんふでたて
30・中宮御所御筆建 1口
 (有形文化財 工芸)

1面が、高さ10、上幅2.5、下幅2.3センの真鍮板6面の筒を、
 高さ1.9センで、脚のひろがり6.8センの、切れ込みをもつ4脚の台座に取り付ける。取付部2枚の受座のすぐ上には細かな平行線の高さ1センの金に、下は24枚の桜花弁の銀の反花を配し、照應させている。筒部の上端は銀の縁をふくらませる。本体の鉄地色の艶消し肌には、ホタテ貝・ジャコ貝・ハマグリ・クルマ貝・サザエ・アワビ等の貝殻と、海藻の模様を、金銀で象嵌する。高度な技術の繊細優美な美術工芸品であり、又豪華ゆかりの逸品である。

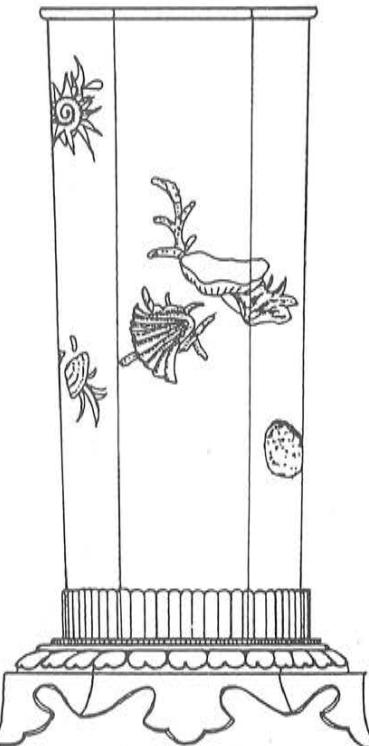
・専光寺蓮澤家で収納する桐箱の表に「中宮御所 御筆建二之内」、裏に「寛政十二庚申歳自 中宮御所賜 豪潮」「文化三丙寅歳二月中旬贈 専光上人」と豪潮が記す。

りょうごんいん あじやり だいかいしよう
 標嚴院 大阿闍梨遍照金剛豪潮大和尚。豪潮は寛延2年(1749)
 6月18日、玉名郡山下村(現大字山下)の浄土真宗安養寺の塔頭
 専光寺の第2世貫道の次男(兄は昇道のち第3世)として生まれた。江戸時代半ば頃で、国内各地に百姓一揆がふえはじめ、やがて外国船の来航も多くなっていく。7歳の時、繁根木八幡宮の神宮寺天台宗寿福寺豪旭(一説に荒尾原空靈院寺)のもとで得度し、快潮と名付けられた。16歳、明和元年(1764)より、天台宗比叡山延暦寺に登って修業に励むこと一通りでなかった。同4年、権律師に任せられた(補任状左頁)。翌年法眼和尚位に叙せられ、密教の秘法を受け、名も豪潮と改めた。

こんのしようそうず
 のち権少僧都、伝燈大法師位と累進した。安永5年(1776)7月寿福寺の師豪旭病気のため帰郷、じじやく こ 師示寂後請われて法燈を嗣ぐ、28歳。豪潮は修法精励、持律堅固で、豪爽磊落、弁才あり人情に通じていた。次第にその高徳と、加持(病気や災難を払うため密教で、印を結び、陀羅尼=呪文をとなえ仏の加護を祈る法)の靈験ある事が、四方に聞こえた。

51歳、寛政11年(1799)、中宮職聖護院宮盈仁親王の奏により、119代光格天皇の皇妃(中宮欣子内親王と典侍藤原婧子)の大病を加持し、婧子には皇子(のちの120代仁孝天皇)の御生誕をみたので、本書に述べた他にも多くの御下賜品があった。中宮欣子は、118代後桃園天皇の皇女、盈仁親王は同天皇の猶子(甥又は養子)というつながりであった。

豪潮54歳の時、人々を飢寒の苦しみから救うため、宝篋印塔を建てはじめ、生涯で大小二千余基に達した。69歳、文化14年(1817)尾張藩主徳川斉朝の懇請により、名古屋城に至り加持し、遂にこの地で生涯を閉じた。天寿87、天保6年(1835)7月3日であった。遺作・遺品は生家に送られた。豪潮の写経や漢詩・一行書・和歌・発句・書状に見る個性的能書も有名で、仏画・鑑賞画(墨戲)も多く残している。明治13年現在地に独立した専光寺では、昭和57年5月、名古屋時雨庵にある豪潮像を模した石像を寺内に安置しその高徳を偲んでいる。



御筆建 実測図
 原図 S=1:1 総高 12.6セン

そうごうちょうしょかんさんしろくきよくびようぶ
10・僧豪潮書寒山詩六曲屏風半双
 (有形文化財 書跡)

この屏風は、本体縦116.6cm、横29.4cmの同大六曲に、寒山の詩28文字を5行に配している。寒山は中国唐代（618～907）天台山国清寺に居て、風流に徹した僧で、法弟拾得と共に称えられる。2人は共に禪道に悟入して、釈迦如来の脇侍文殊菩薩・普賢菩薩の化身とも言わされた。その寒山が悟りの境地を詠んだ漢詩を書いたものである。豪潮は禪の境地を愛して、84歳の時「寒山はどこへ逃たぞ時雨」の発句の贊をした戯画（俳画）1幅もある（熊本市個人蔵）。

豪潮が書（描）き遺した作品は、千点とも2千点とも言われるが、失われた物も多く、現存するものは数百点と見られている。

この書跡は、款記に「右寒山詩 癸亥初冬豪潮寫」とあるように、享和3年（1803）豪潮55歳の書。年紀のある作品の中では最も若い頃のものとされている。

彼の書は70歳80歳になって独特の風趣を發揮したと言われる。右頁の紺紙金泥仏説阿弥陀経の細字の楷書の謹嚴さと違って、次の様な評価を得ている。

「豪潮の書は少しの気どりも邪念もない。實に淡如として水の流るる如く悠々と屈せず、温和である。無

論弄筆の技でなく、其人丸出しであって、凡欲を超越

したものである。奔放とも見られる趣もあるが、其中にも嚴として冒しがたいものがある。」（堅山南風『墨美』No.95）。「他に見ることのできない水墨のにじみを無限に生かし、熟達しきった運筆と氣迫とが一体となって、豪潮書道芸術の境涯を打ち立てた。」（本町文化財調査書）。豪潮の書は、豪潮が生涯を通じた仏道修業の道々で至り得た独特的芸術的境地であろう。



僧豪潮書寒山詩六曲屏風 116.6×29.4cm (各)

右寒山詩 冬癸亥初 豪潮寫	尋尋對問西東 問うことを勞せず	尋ぬるに対して西東を	時常皎潔不	一 點空明月照	萬丈巖前一点空し	千年石上古人 千年石上古人の蹤と
---------------------	--------------------	------------	-------	------------	----------	---------------------

同上駄文（小文字は読み下し文）

左下印は「豪潮之印」と刻む。

31・僧豪潮筆紺紙金泥仏説阿弥陀經

1 帖

(有形文化財　　書跡)

姚秦三藏法師姚掌羅什奉詔譯
如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園
與大比丘衆千二百五十人俱皆是大阿鞞
漢衆所知識長老舍利弗摩訶目犍連等
迦葉摩訶迦旃延摩訶俱締羅離波多周利
槃陀伽難陀阿難陀羅睺羅擣梵波提賓遮
盧頗羅遮迦留陀夷摩訶劫賓那薄拘羅彌
覺揅駁如是等諸大弟子特諸菩薩掌訶薩
文殊師利法王子阿逸多菩薩乾陀訶提婆
薩常精進菩薩與如是等諸大菩薩及釋提
桓因等无量諸天大衆俱

この仏説阿弥陀経は、厚
手上質の紺紙に金泥を以て
手書きされ高雅絢爛、左頁
の詩書や書簡に見る濃淡の、
躍動し或いは流れるような
美しい文字と比べる時、そ
の細かな楷書の一点一画も
ゆるがせにしない謹嚴さは
驚くばかりである。又諸本
に脱落していた22字を書き
加えその典拠を示すなど、
豪爽の學問的探求心を物語

る。本文118行、1,848字、
横に全長269.4セン、縦幅28セン

僧豪潮筆仏說阿彌陀經

(折本装) 卷首20行

を表裏返しに、横幅8.7センチの31曲、縞子を以て表装した折本で、木箱に納める。
施主岡寄常暢が、文化7年（1810）冬62歳の豪潮に書いてもらったもの。

豪潮は若い頃比叡山に於いては、天台宗を学んだが、真言宗や禅宗、又法然の浄土宗や、親鸞の浄土真宗にも通じていたであろう。説法に当たっては、民衆の機微に応じて説く所も多端であったという。みずからは死の直前「南無阿弥陀なむあみたぶと生れ来て南無阿弥陀仏と共に往生」の辞世を残している。

仏説阿弥陀経は浄土真宗で用いる「浄土三部経」の一つとされている。この経の意味は「仏のお説きになった阿弥陀経 姚秦の三藏法師、鳩摩羅汁が詔を奉じて訳す このように、わたしが聞いたのであるが、あるとき尊き師、阿弥陀は千二百五十人もの多くの修行者たちとともに、舍衛国の祇園精舎に滞在しておられた。これらの人々はみな、さとりの境地に達した阿羅漢であり、世一であつた。すなわち、長老舍利弗、摩訶目犍連（中略）。そこで、尊き師、といわれた。一舍利弗よ、ここから西方に、十万億のほとけの国土を過ぎたところ）（極楽）という名の世界がある。その世界には、限りないのちとひかりを仏というほとけが住んでおり、いま現に教えを説いておられる。舍利弗よ、（あるところ）と名づけるのであろうか？その世界に住む生ける者たちには、身体もすべてなく、ただ幸せをもたらすものばかりがそこにある。それ故に、そ（あるところ）と名づけるのだ。（以下略）（講談社『お経 浄土真宗』に拠る。）

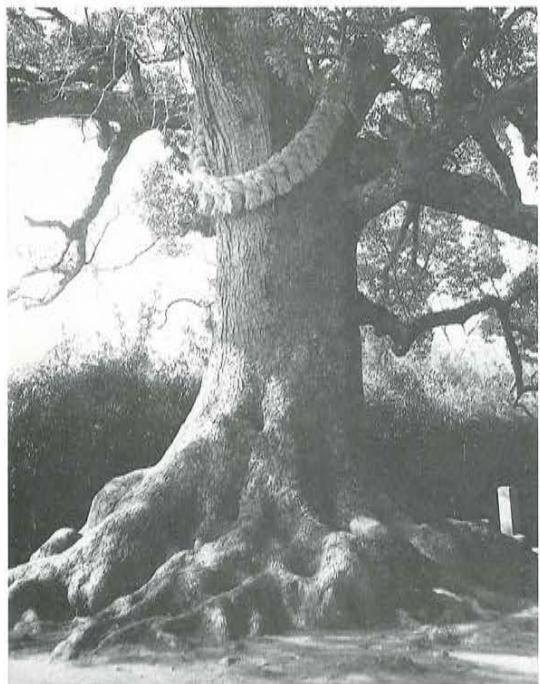
世傳諸本，一心不亂以下无三十二字，今
加三書之者，據三筑前宗像郡所碑刻、隋陳仁
陵真跡、及我藩光明寺所藏、唐善導大師
手書之文一也。

仏說阿彌陀經奧書（釋文）

に知られていた長老たちであった。すなわち、長老舎利弗、摩訶目犍連（中略）。そこで、尊き師、
仏陀は、舍利弗長老にいわれた。一舍利弗よ、ここから西方に、十万億のほとけの国土を過ぎたと
ころに、〈幸あるところ〉（極楽）という名の世界がある。その世界には、限りないいいのちとひかり
の体現者である阿弥陀仏というほとけが住んでおり、いま現に教えを説いておられる。舍利弗よ、
その世界をなぜ〈幸あるところ〉と名づけるのであろうか？その世界に住む生ける者たちには、身体
の苦しみも心の苦しみもすべてなく、ただ幸せをもたらすものばかりがそこにある。それ故に、そ
のほとけの国土を〈幸あるところ〉と名づけるのだ。（以下略）（講談社『お経 浄土真宗』に拠る。）

1・貴船神社の樟 1株

(天然記念物 クスノキ科クスノキ 一名クス)



貴船神社の樟 主幹部と根張りの状態
北より写す

樹高35.0、幹周り7.7、根張り東西10.0、南北7.0
メートル。樹齢推定750年以上。

樟は南参道と境内南半分をおおい、樹根は隆々と
張って大地をつかむ。地上4.0メートルより7本の大枝を出
し、下より第3枝は最も長く北西へ27.0メートル伸びる。
地上6.0メートルより主幹は2つに分かれ、さらに6本と3
本に分枝し無数の小枝となる。樹勢盛ん。

社殿の東北「檣埋藏之碑」には、48代称徳天皇の
天平神護2年(766)に山城より水徳神(水を司る
神)貴布彌大明神の分霊を移し、同年7月19日に御
用船を神木のこの楠に結び止めこの地に鎮座され、
船の檣は境内に埋めたと記す。祭神は高麗神。

34・役場の樟 1株

(天然記念物 クスノキ科クスノキ
一名クス)

樹高18.0、幹周り4.7、根張り東西5.3、
南北5.5メートル。樹齢推定85年。

地上2.4メートルより東西に2本とあと1本の
大枝に分かれ、2本はさらに3本と5本
の枝となる。樹容に風格がある。

明治6年(1873)7月にできた内野校
と野口校を統合して、大野村が同42年
(1909)5月、大野尋常高等小学校を、
当時の桑畑(前大野小学校、現町役場の
敷地東半分)に新設し、樟・銀杏・桜・
柳・梧桐などを植えた時の1本である。

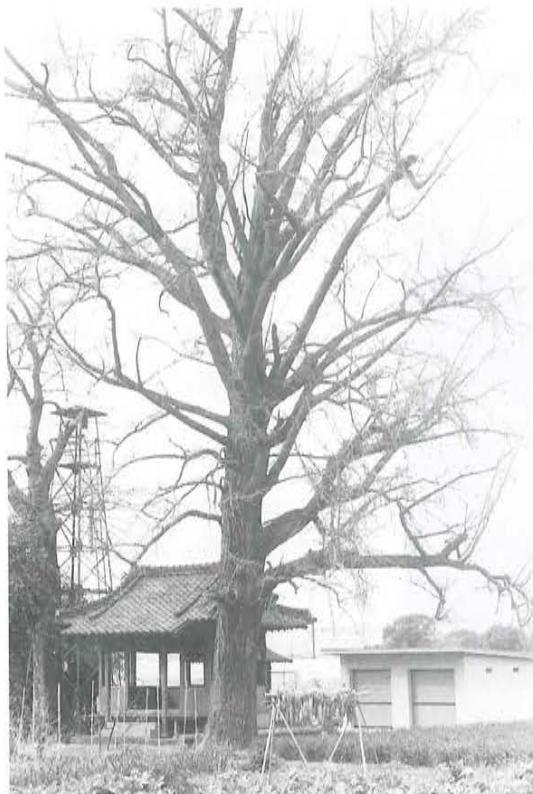
樟の字が正しく、楠の字を使うのは間
違い。楠その物は日本には産出しない。
直径2メートル、高さ20メートルに達する常緑高木。

日本には関東地方以西、濟州島・中国・



役場の樟 北西より写す

ベトナムに分布する。生長が早く、長命で公害に強いので、各地に植えられる。材と葉から樟脑を
とり、セルロイド製造原料とするほか、防虫剤や薬用とする。材質は固く、きめも美しく香氣がある
ので、建築・船舶の内装材や、仏壇・家具その他に利用する。県及び町の木として指定されている。



上野口菅原神社の銀杏 落葉期 南東より写す

かみのぐちすがわらじんじや いちょう
18・上野口菅原神社の銀杏
1株 (天然記念物
イチョウ科イチョウ)

樹高23.5、幹周り4.1m。樹齢推定400年以上。
真っすぐな幹が高く伸び、第1枝が地上4.5mより
北東へ10.2m伸びる。ほぼ0.5~1.0m間隔で
30本近い大枝が八方へ広がり、境内の半分を覆
う。

銀杏は直径5m、高さ45mに達する落葉高木
で、中国原産。世界各国に分布する。雌雄異株。
生長が早く強健。神社や寺院によく見かける。
公園や街路に植えられ、秋には美しく黄葉する。
材は緻密で光沢があり、建築・器具・彫刻用に、
種子は銀杏といい食用にする。漢字では銀杏・
公孫樹と書き、葉の形が鴨の足に似ているので、
中国では鴨脚子とも書いた。日本で「いてふ」
と書くのは、「いちえふ」(一葉)から来たとい
う。

しもまえはら
16・下前原のたぶのき 1株
(天然記念物 クスノキ科タブノキ
一名イヌグス)

荒木家入口左脇、塀の内側にある。樹高17.0、幹
周り3.3m。樹齢推定300年以上。地上4.0mで主幹よ
り大枝1本が北へ分かれて伸びる。さらに、1.3mの
高さより東西に1本ずつの枝と、それより0.6mの高
さで、主幹は3本に分かれ多くの小枝となる。

直径1m、高さ15mに達する常緑高木で、5月頃
花をつけ、黒紫色の実となる。幹は暗褐色、枝は緑
色で赤みを帯びる。青森県・岩手県以西の本州・四
国・九州・沖縄・朝鮮半島・中国・フィリピンに分
布する。葉を蚊取り線香に、樹皮を線香や染料に、
材は器具・家具・建築に用いる。タブノキのタブの
語源は分からぬ。犬樟の名は、樟に似ていて、樟
ではなく、材質が劣るからだと言う。



下前原のたぶのき 北より写す

にしけ そてつ
22・西家の蘇鉄 1株 (天然記念物 ソテツ科ソテツ)



西家の蘇鉄 北より写す

樹高1.83、枝張り根元より東へ4.0、南北へ3.0トメ。樹齢推定700年以上。

主幹は東北へ約45度傾き、地上1.2トメで枯れ切れ、そこより主幹と別に大小2本の枝を出す。外に1の枝は東北へ伸び、2.0トメの高さより下へ波打って又立ち上がり全長5.3トメ。大小5本の枝を出す。2の枝は東へ低く伸び長さ3.0トメ、先端は立ち上がる。3の枝は地上すれすれを4.1トメ伸びて立ち上がる。

あんようじ そてつ
28・安養寺の蘇鉄 1株 (天然記念物 ソテツ科ソテツ)



安養寺の蘇鉄 北東より写す

樹高4.9、枝張り東西3.8、南北6.7トメ。樹齢推定500年以上。

根元幹周り5.4トメより8本の大枝が分岐し、その中の1本は大きく南に傾いて垂直に立ち上がり4.5トメ。途中より2枝が分かれて高く直立する。8本中北へ伸びたのは4.9トメ。各枝には多くの小枝を付け、幹丈1.0トメ以上もので10数本を数え、よく茂っている。

ソテツ（蘇鉄）はソテツ科の常緑低木。宮崎県以南の九州から沖縄及び中國大陸南部・台灣に分布する。今は多く観賞用、庭園樹として植えられている。

高さ約5.0トメに達する。幹は円柱状で径およそ30センチとなる。うろこ鱗状の古い葉の跡が残り、又よく分枝を生ずる。幹の頂上に多くの葉が付き、四方に広がる。長さ0.5~1.0トメの葉はまた多くの小葉に分かれ、みきたけ鋭くとがり、濃緑色でつやがある。雌雄異株。暖地では夏に葉の中央から花穂を出す。幹から除毒して澱粉をとり、暗紅色の種子は食用となる。ソテツは蘇鉄の意味で、枯れかかった時、鉄くずを肥料としたり、あるいは鉄くぎを幹に刺すと蘇生するというので、この名がある。

付録 国指定天然記念物
昭和9年12月28日指定

おおのしも
大野下の大ソテツ 1株

大字大野下626番地
蘇鉄秀夫方

蘇鉄氏住居の南、方形玉垣の中、高さ約1メートルの盛土上にある。北へ最大幹長6.4メートル。途中より最大幹高3.7メートル。同上幹囲り2.2メートル。枝張り南北へ9.5メートル。東西へ6.3メートル。根元幹周り10.6メートル。大枝の数9本。

北へ最も伸びた大枝は、支柱5個に支えられ、全長6.4メートルの先端1.0メートルは東へ曲がり、地上より幹頭までの高さ3.0メートル、途中より幹高3.7メートル、長さ2.0メートルの枝の外、6本の枝を出す。この枝の根元1.0メートルの高さより4.6メートルの枝、又別に基部より3.2メートルの枝が直立する。西へ伸びた4本の枝の内、やや南寄り

の1本が最も長く4.2メートルで高さ2.6メートル。その基部より高さ3.2メートルの枝が立ち上がる。同じ基部より北寄りの1本は低く長さ4.5メートル。この上をまたいで交差する枝が南西へ伸びる。南は樹勢衰え、1本の枝は地上0.7メートルの高さで3.0メートル伸び、短い1本は、半分腐朽して盛土の上を這う長大な幹より出て長さ1.5メートルである。東に伸びていた長さ7~8メートルの5本の枝は、昭和39年頃より樹勢が衰えてきたので、町は白蟻駆除を行ない、地中に、穴を開けた径20センチのパイプの周りに栗石を埋めて、排水工事を施し、また玉垣を設けて保護に努めたが、樹勢は回復せず腐朽していく、今は根元の古株だけ残っている。

樹齢700~1,000年と言われるこの大ソテツ（雌株）は、日本全国の大ソテツの中でも、3~4位を下らぬ大きさとされてきた。伝説では、家人が皆耕作に出た留守中は、屋内で糸を紡ぐ木綿車の音が聞こえるとか、無断で大ソテツの蘖（ひこはえ）（根株から出る芽、ここでは分枝）を持ち去る者には、怪異が生じて大野下の村内から出る事は出来なかった等と言う。現在は、蘇鉄氏が根元に土を盛り、毎年12月に鶏糞2~3俵を施肥し、5月八十八夜頃葉を摘むなど世話をしている。



国指定大野下の大ソテツ

西より写す 平成2年9月 撮影・岡本昭典

付記 17・高道巖島神社の櫻（ケヤキはニレ科の落葉高木、ツキノキともいい楓と書く）は、樹高17.9メートル、幹周り4.3メートル、樹齢推定400年以上であったが、昭和61年頃より老朽化し枯枝が落ちて危険であったため、約7本の大枝を岐部より切り落とし樹容を失ったので、平成2年4月20日に指定を解除したものである。

岱明町文化財関係略年表（校区別）

文化財保護委員会

時代	西暦	日本の出来事	大野校区	睦合校区	鍋校区	高道校区
(先土器・縄文時代)		原始社会（先土器文化） 旧石器 狩漁・採集の生活 新石器 骨角器 繩文式土器	野口年の神遺跡 (ナイフ型石器・黒曜石) 大野下目倉尾遺跡 野口尾崎貝塚 中土西遺跡	上今泉遺跡 (ナイフ型石器・黒曜石) 西照寺備中石器 (ナイフ型石器・サヌカイト)		
紀元前 紀元後	57	弥生式土器 金屬器・天水町斎藤山貝塚より日本 最古の鐵器出土 倭の小国分立	中国後漢の光武帝倭の奴国の使者に 印綬を賜う	④年の神遺跡 ②貝製腕輪 ③新生式土器高环 下前原正林住居址 大原遺跡 ⑤野口大原石棺群 ⑥三角縁神獸鏡	塚原遺棺群	山下中道貝塚
	107	倭の國王帥升ら後漢に入貢	この頃より倭国大いに乱れる 登呂遺跡			
	147	この頃より倭国大いに乱れる				
	239	邪馬台國女王卑弥呼魏に遣使				
	266	倭の國王卷と西晋へ遣使				
	391	大和朝廷はほぼ全国を統一（4世紀前半 前方後円墳出現 倭軍、百濟・新羅を破る 江田船山古墳（太刀など出土）				
	413～478	倭王中國へ遣使				
	527	筑紫磐井の反乱				
	593	聖德太子撲政となる				
	645	大化の改革 玉名平野に条里制				
	710	律令国家の形成 平城京に遷都				
	743	奈良時代 腹赤の魚を朝廷に献上				
	766	貴船神社鎮座と伝える ①貴船神社の樟				

766 貴船神社鎮座と伝える
①貴船神社の樟

766 貴船神社鎮座と伝える
①貴船神社の樟

766 貴船神社鎮座と伝える
①貴船神社の樟

古代

平安時代	794 平安京に遷都 大鳥が玉名郡倉の上に集まる 875 武士がおこる（10世紀中頃） 961 紀隆村繁根木八幡宮を勧請したと伝える 寄進地系荘園ひらまる 1017 藤原道長太政大臣、賴通撰 1045 荘園整理令 1167 宋銭の流入	鎌倉時代	1192 源頼朝將軍（武家政治） 1247 小代重後野原城頭職 元寇文永の役 1274 " 弘安の役 1281 大野岩崎太郎等恩賞にあずかる 1289 大野重幸野口を分知 中・北尾崎は託贈氏の領	南北朝時代	1334 建武中興（建武の新政～35） 1338 足利尊氏將軍 1359 葉池武光筑後川に戦う 1392 南北朝の合	室町時代	1392 青磁碗 ⑥下村（内野）城 賛院次官親能下向説 大野重幸野口を分知 中・北尾崎は託贈氏の領	戦国時代	1491 ⑦西中十五輪塔群 前長船祐定作 1516 ⑨備前五輪塔	江戸時代	1527 ⑪大野下田端五輪塔 群雄割拠・動乱の時代。 九州は龍造寺・大友・島津の争い 室町幕府滅亡・織田信長 1560 豊臣秀吉九州平定 1573 室町政策 1587 豊川忠玄配流、細川忠利着任 1603 加藤嘉泰死 1632 室原の乱 1637～38 封建社会の動揺	安土・桃山時代	1632 大野牟田新地できる？ 1637下前原のたぶのき 1803 ⑩僧豪廟書六曲屏風	江戸時代	1801 ⑩今泉家阿弥陀如来坐像 1853 浮田池 1859 ⑧横山藤原祐包作太刀 1872 学制公布につき各旧村に小学校おひおいできる。1879日16ヶ村誕生（今の大字）	明治	1867 大政奉還 1868 五箇条の御誓文（明治新） 1877 西南戦争・田原坂の激戦 1889 町村合併（前年市制・町村制公布）	明治	1889 1889大野村誕生 1909 1909役場の樟 1927 大野下駅	大正	1918 米騒動	大正	1941～45 太平洋戦争	昭和	1946 新憲法公布	昭和	1955 四ヶ村合併岱明村、1965岱明町となる。	昭和	1982 専光寺に豪廟像を開眼
中世	/	鎌倉時代	/	南北朝時代	/	室町時代	/	戦国時代	/	江戸時代	/	安土・桃山時代	/	江戸時代	/	明治	/	近世	/	近代	/	現代	/						

註、『熊本県埋蔵文化財遺跡調査表』及び『岱明町遺跡分布図』には、上掲以外の田添氏序文<研究ノートより>中の遺跡等も挙げている。

指定文化財所在地略図

(算用数字は文化財指定番号)

荒尾市



日嶺
202m

玉名市

長洲町

古閑
上
庄
山

総合グラウンド
野
中
土
役場

国道208号線
下前原
玉名工業高校

附大
玉名高校

扇
崎
鍋小
鍋

下沖洲

行末川

有明海

玉名市

1 : 35,000

0 500 1000 1500m

作図・河原巧

県道大牟田・宇土線

境川

あとがき

邪馬台国を思わせる佐賀県吉野ヶ里遺跡に刺激された訳ではあるまいが、ここ数年、多くの市・町は、歴史事実の発掘や歴史による市・町起こし、市史・町史の出版に相当の努力を払っていることは報道されている通りである。

岱明町では、昭和51年3月に文化財保護条例を公布し、指定文化財を保存・活用し、町民の文化的向上に資することになった。4月には保護委員会を置き、5人の保護委員を委嘱した。田添夏喜あと岡本昭典、門岡久、中原利徳あと中原忠義あと河原巧、原口市松あと池上直、故蓮澤義韶あと村上高久である。保護委員は、年に10~11回会合し、町内各種文化財の調査、指定資料の作成・協議、指定意見の申出、研修、説明標柱立て、保存パトロール、清掃等を行ってきた。

教育委員会が保護委員会の意見を聞いて、町にとって重要なものとして指定した文化財は、所有者や管理者の皆さん、又社会教育課のご協力によって、平成3年3月末までに、36件に及んだ。内1件は解除されたが、建造物・工芸・考古資料・彫刻・書跡・古記録などの有形文化財の外、天然記念物・史跡など多様で、岱明町の豊かな歴史を物語っている。

会長田添夏喜氏は、協議のための指定資料の執筆、ガリ版切り、写真撮影、実測図の作成等を独立で行なうと共に指導に当たられたが、平成2年3月で退任された。(同氏は長年の文化財保護の功績によって平成2年度文部大臣表彰を受けられた。) 残任の私共は、貴重な指定資料を眠らせないように指定文化財の解説書をつくり、町内の皆さん特に小・中・高校の若い皆さんを利用して下さればと思い、教育委員会にお願いし、町内全戸に無償配布としていただいた。

編集に当たっては、指定資料を基礎とするが、それとは主旨も違うので、努めて新しい研究内容を加え、郷土や日本の歴史にも触れ、興味が持たれるようにと考えた。内容はなるべく古い時代から順に並びかえ、左右両ページが関連し、見くらべられるようにした。(但し、36・僧豪潮筆七言詩しじこんしよからさきのまつ書唐崎松等四幅は、都合により割愛した。) また、大野下大ソテツや略年表・所在地図を添えた。文章はわかりやすくと、思ったものの、1物件1ページという制約はあり、専門的用語を避けることは出来ず、難しい表現がある点はお許し願いたい。ふりがなはなるべく多く付けた。

掲載の写真・実測図・地図などは、2、3を除いて指定資料から採った。田添前会長の手に依ったもので一々断らなかった。文章は5人で分担し、門岡が補筆したあと、田添前会長、財團法人日本美術刀剣保存協会熊本県支部長・刀剣登録審査員石原幸男氏、熊本市立熊本博物館富田紘一氏、熊本県教育庁文化課(当時、現在八代市立美術館・未来の森ミュージアム副館長)大倉隆二氏、同前川清一氏にご指導をいただいた。他に高野山添田隆昭氏、玉名市吉田莊一郎氏、大牟田市杉山伸寛氏のご助言を得た。多くの文献を参考とした。お礼を申し上げる。なお不備の点もあると思うので、お気付きはご叱正をお願いする。

序文はお三方よりいただいた。また岱明印刷には印刷・製本上の無理を快よくきいてもらった。今後とも町内の皆さん、文化財保護に関する一層のご理解ご協力を願いたい。

平成3年9月

岱明町文化財保護委員会 会長 門岡 久

編 集
岱明町文化財保護委員会
会長 門岡 久
委員 村上 高久
" 池上 直
" 河原 巧
" 岡本 昭典

岱明町の指定文化財

平成3年（1991）11月28日 印刷

平成3年（1991）12月1日 発行

編集 岱明町文化財保護委員会
発行 岱明町教育委員会
熊本県玉名郡岱明町大字野口2129
T E L (0968) 57-1111
印刷 (有)岱明印刷
熊本県玉名郡岱明町野口2532
T E L (0968) 57-0141

表紙 三角縁方格二神二獸鏡

表紙題字 村上高久

裏表紙 岱明町々章

メモ

メモ

